

タイ語における他動性と使役性

高橋清子（神田外語大学）

1. はじめに

タイ語¹の他動性や使役性についての論考は数多く存在するが、その多くは他動詞の分類に関する論考（e.g. Iwasaki & Ingkaphirom 2005: 109-121, Kullavanijaya 1974, メーターピスイット 2000, 峰岸 2007, 坂本 1985, Thepkanjana 1992, 2000, 2003）か、伝統的に使役標識とされている語「hây, tham, tham hây」を含む統語形式の意味機能に関する論考（e.g. バンチョンマニー1999: 33-56, Dejthamrong 1970, 江田 1983, Indrambarya 1997, Iwasaki & Ingkaphirom 2005: 323-347, Lekawatana 1970: 79-90, 三上 1984, Mikami-Nomura 1994, Needleman 1973: 63-73, ニラタワット 1980, Pothipath 1999, Rangkupan 1997, 2007, Sereechareonsatit 1984: 271-272, Sriphen 1982: 103-122, 143-167,

¹ 一般に、タイ語は次のように特徴付けられる。①声調言語、②孤立語、③「主語 A, 動詞 V, 目的語 O」, 「主語 S, 動詞 V」, 「被修飾語, 修飾語」という基本語順を持つ AVO/SV 言語、④複数の動詞句が接続詞を介さずに連続することを許す動詞（句）連続言語、⑤主語や目的語といった統語上の概念よりも主題という情報構造上の概念のほうが優位に働いて文章が構成されていく主題卓越言語。タイ語には、印欧語研究の常識（言語学一般の常識）から逸脱している以下のような特徴もある。⑥文法範疇の範例 paradigm が成立しておらず、文法範疇概念の特定化が必須ではない（Bisang 1995, 1996, 2004, 峰岸 2000）。文法範疇の値を特定しなければ文法的な発話にならないという言語ではない。⑦名詞・動詞（内容語）と前置詞（機能語）は連続体をなし、両者を厳密に区別することが難しい（Intratat 1996, Takahashi 2006）。形態の違いが語類の違いを反映する言語ではない。⑧名詞句のみならず動詞句についても定性の区別（定・不定）がなく（Bisang 1995, Diller 1988）、文法的に定動詞を規定することができない（峰岸 2000, 2002a, 2006）。1つの文に1つの定動詞が必ず含まれることを前提として統語構造を分析できる言語ではない。⑨動詞と名詞句の結び付きはかなり自由で、動詞の項（主語、目的語）と非項（付属語、補語）を明確に区別することができず、動詞の必須項を規定することができない（三上 2002, 峰岸 1988）。結果として、動詞が名詞句を項として支配する階層構造を持った文という単位を規定できない（峰岸 2002b, 2006）。動詞固有の項構造を規定できる言語ではない。⑩定性と同様、他動性（自動詞・他動詞の区別）の解釈は通常、談話文脈に基づく（Diller 1993, Thepkanjana 2003）。一項動詞か二項動詞かという項構造から他動性を規定できる言語ではない。

Thepkanjana 1986: 23-76, Vichit-vadakan 1976, Warotamasikkhadit 1994, Wongsantiwanich 1983, Yap & Iwasaki 1998, 吉川 1978) である。それらの論考はいずれも、他動性や使役性をめぐるタイ語表現の全体像を明らかにすることを目的とはしていない。そこで本稿では、タイ語における多様な他動性および使役性の表現を、形式と意味機能の観点から分類することによって、体系的に説明することを試みる。² 本稿では根源的構文文法 (Croft 2001)³ の見地に立ち、[(意志 VP+) *hây* + 意志 VP] という統語形式を持った間接使役を専門に表す構文 (意志的行為 *volitional action*⁴ を表す動詞句と使役標識 *hây* 必須構成素とする構文) をタイ語における分析的使役構文として認め、その他の構文と区別する。また、分析的使役構文の構成素の *hây* だけを使役標識 *causative marker* として認め、その他の構文の構成素の *hây*⁵ と区別する。

² 本稿執筆の過程で編者 (プラシヤント・パルデシ氏, 西光義弘氏), タサニー・メーターピスウィット氏, 新里瑠美子氏, ネリダ・ジャーキー氏, 峰岸真琴氏から有益なコメントや示唆をいただいた。感謝申し上げたい。もし本稿に不備や誤りがあるとすれば、すべて筆者の責任である。

³ Croft (2001) の主な主張は以下のとおりである。①音形と意味がシンボリックな関係で結ばれている様々なレベルの言語単位 (統語構造, 慣用表現, 形態素, 語) が構文であり, 文法の根本単位は構文である。②統語構造の特徴は個別言語ごとに異なり, それぞれの言語に固有の構文がある。③構文とその構成素の基本的関係は「全体一部分」の関係である。構文 (全体) は構成素 (部分) を足した合計以上の意味を持つ。構成素 (部分) は構文 (全体) との関係でその文法役割が決まる。④ある言語に認められる数多の構文間の関係は「抽象スキーマー具体例」の関係である。それらの構文の分類には人間の範疇化能力の原則が適用できる。⑤言語の普遍性は意味地図 (複数の意味機能因子によって規定される意味機能の連続体) 上の意味機能の分布の型や制約によって説明できる。

⁴ 本稿では「意志」と「意図」の用語を区別して使用する。「意志」は「行為の源である意欲 *will* が問題となる *volition*」の意に用い, 「意図」は「行為の目的や結果への期待が問題となる *intention*」の意に用いる。

⁵ その他の構文の構成素の *hây* を筆者は以下のように分類する。動作主を表す名詞句の後ろに生起し, 授与物を表す名詞句 (と被授与者を表す名詞句) を従える *hây* は「誰かが (誰かに) ある物を与える」という実質的意味を表す動詞 *lexical verb* である (e.g. *phôm hây khõn khũan kháw* ‘私, 動詞 (与える), 贈り物, 彼女; 私は彼女に贈り物をあげた’)。動作主あるいは有情者を表す名詞句と意志的行為あるいは願望を表す動詞の後ろに生起し, 目的事象や願望事象など非現実の被誘発事象を表す補語を従える *hây* は被誘発事象補語標識 *irrealis complementizer* である (e.g. *phôm yàak hây kháw maa* ‘私, 欲する, 補語標識, 彼女, 来る; 私は彼女に来て欲しかった’)。行為を表す動詞句の後ろに生起し, 着点や受益者を表す名詞句を従える *hây* は斜格標識 *oblique (allative / benefactive) case marker* である (e.g. *phôm sòn cõtmaay pay hây kháw* ‘私, 送る, 手紙, 行く, 斜格標識, 彼女; 私は彼女に手紙

タイ語の動詞には、「殺す」などの典型的な他動詞タイプ (例文(1)) と「死ぬ」などの典型的な自動詞タイプ (例文(3)) があり、その間に「見える」などの中間的なタイプ (例文(2)) が認められる (メーターピスウィット 2000)。他の言語と同様、タイ語の動詞の他動性は連続的である。

(1) maanii khâa maaná?
マーニー 殺す マーナ
マーニーはマーナを殺した [統語的他動詞構文]⁶

(2) maanii hěn maaná?
マーニー 見える マーナ
マーニーはマーナが見えた [統語的他動詞構文]

(3) maanii taay
マーニー 死ぬ
マーニーは死んだ [統語的自動詞構文]

また、やはり他の多くの言語でそうであるように、タイ語では直接使役は例文(1)のような統語的他動詞とその前後に生起する名詞句⁷ からなる統語的他動詞構文によって表され、間接使役は例文(4)のような使役標識を含む分析的使役構文によって表される。

(4) maanii {sàŋ / bòok / plòy} hây maaná?
マーニー {命じる / 伝える / 放任する} 使役 マーナ
sâaŋ tùk
建てる 建物
マーニーはマーナが建物を建てるように {命じた / 伝えた / 放任

を送った’; phǒm bòok thaaŋ hây kháw ‘私, 告げる, 道, 斜格標識, 彼女; 私は彼女に道を教えてあげた’)。行為を表す動詞句の後ろに生起し, 何も名詞句を従えない hây は恩恵標識あるいは悪事標識 benefactive / malefactive marker である (e.g. phǒm bòok thaaŋ hây ‘私, 告げる, 道, 恩恵標識; 私は道を教えてあげた’; phǒm tǒp nâa hây ‘私, 平手で叩く, 顔, 悪事標識; 私は顔を叩いてやった’)。

⁶ 本稿では, 便宜的に, 動詞の後ろに名詞句が直接続く形式を「統語的他動詞構文」と呼び, 動詞の後ろに名詞句が続かない形式を「統語的自動詞構文」と呼ぶことにする。また, やはり便宜的に, 後ろに直接名詞句が生起している動詞は「統語的他動詞」であり, 後ろに直接名詞句が生起していない動詞は「統語的自動詞」であるとする。

⁷ ただし, いずれも必須項ではない。注 1 の⑨⑩を参照せよ。

した}

マーニーは {命じ / 伝え / 放任し} マーナに建物を建てさせた [分析的使役構文]

しかしタイ語の他動性、使役性に関する表現には、こうしたよく知られている形式の他にも様々な形式がある。例えば、例文(5)のようなある文脈の中での自然の帰結を表す構文や、例文(6)のようなある出来事を契機としたもう1つの出来事の出現を表す構文などがその例として挙げられる。使用頻度や表現機能の点から言って、例文(1)~(6)の形式はどれも等しく基本的なタイ語の言語形式である。

(5) maanii tii maaná? taay

マーニー 叩く マーナ 死ぬ

マーニーはマーナを叩きマーナが死んだ [因果動詞句連続構文]

(6) maanii tham hây maaná? sǎ cay

マーニー 契機 マーナ 悲しむ

マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが悲しむ」という事態を引き起こした

マーニーはマーナを悲しませた [契機接続詞構文]

本稿の主張は以下の3点に要約される。第一に、他動性や使役性にかかわる様々なタイ語表現は次のように大きく4つに分類できる。

[1] 動詞の語彙的意味による「他動性表現」⁸

統語的他動詞を含む動詞句1つから成る「統語的他動詞構文」(e.g. 例

⁸ 他動性表現 (統語的他動詞構文, 統語的自動詞構文) については第 3.1 節を参照せよ。本論文集収録論文「白モン語における他動性」で Jarkey 氏はタイ語と同じ孤立語である白モン語の他動性について網羅的、体系的に論じている。動詞 (句) 連続構文は単一の節を成すのであるから、その他動性を問題にすることができる (注 5) という彼女の考えに賛同する。白モン語では、軸 SVC (Pivotal SVC), 除去 SVC (Disposal SVC), 達成 SVC (Attainment SVC) と彼女が呼ぶ動詞 (句) 連続構文こそが基本他動性 cardinal transitivity の表現であり、統語的他動詞 1 つから成る統語的他動詞構文は動詞 (句) 連続構文よりも他動性の程度が低い、という主張は白モン語の言語事実を踏まえた合理的な主張である。孤立語の動詞 (句) 連続構文の類型を考える上で、彼女の分析結果は示唆に富む。一方、タイ語における他動性や使役性に関連する表現の関係性に焦点を絞って考察した本稿では、他動性の問題を深く掘り下げることができず、タイ語表現の他動性の高低について詳しく論じることができなかった。今後の課題としたい。

文(1)(2))

統語的自動詞を含む動詞句 1 つから成る「統語的自動詞構文」(e.g. 例文(3))

[2] 動詞句連続構文の分析的, 複合的意味による「結果性表現」⁹

接続詞を介さずに結び付けられた 2 つの動詞句 (原因事象を表す先行動詞句と結果事象を表す後続動詞句) から成る「因果動詞句連続構文」(e.g. 例文(5))

[3] 使役標識を含む統語形式の機能的意味による「使役性表現」¹⁰

使役標識と意志的行為を表す動詞句から成る「分析的使役構文」(e.g. 例文(4))

[4] 接続詞の機能的意味による「契機性表現」¹¹

契機接続詞と動詞句から成る「契機接続詞構文」(e.g. 例文(6))

第二に, これら 4 種類の表現が互いにどう関連しているのかを明らかにするためには, 動詞の語彙的意味 (動態性 *kinesis*, 限界性 *aspect*, 瞬間性 *punctuality* など) やその動詞が表す事象に含まれる事象参加者の意味役割や意味特徴 (意志性 *volitionality*, 制御性 *controllability*, 有責任性 *responsibility*, 受影性 *affectedness*, 個別性 *individuation* など) といった, いわゆる命題レベルの意味¹² を分析するだけでは不十分である。

第三に, タイ語のこれらの表現の分類に有効なもつとも基本的な意味要素

⁹ 結果性表現 (因果動詞句連続構文) については第 3.2 節を参照せよ。タイ語話者が因果動詞句連続構文を使って聞き手に伝えようとする意味の核心は, 話者の解釈に支えられた「結果性」(第 3.2 節) という意味であり, それはこれまで論じられてきた「他動性」(第 3.1 節) や「達成アスペクト」(cf. Thepkanjana & Uehara 2009, 上原 & Thepkanjana 2009) の意味とは次元の異なる意味である, というのが本稿の主張の 1 つである。タイ語の因果動詞句連続構文にまつわる語用論レベルの意味 (言語使用者の解釈) と, 統語的他動詞構文や統語的自動詞構文にまつわるいわゆる命題レベルの意味 (節が表す命題的, 概念形成的意味) とをはっきり区別するために, 本稿では便宜的に, 前者を「結果性」と呼び, 後者を「他動性」と呼ぶことにした。

¹⁰ 使役性表現 (分析的使役構文) については第 3.3 節を参照せよ。

¹¹ 契機性表現 (契機接続詞構文) については第 3.4 節を参照せよ。

¹² 「いわゆる命題レベルの意味」とは, 動詞を核とする節 *simplex sentence*, *simple clause* が表す「述語タイプ (状態, 出来事, 活動といった事象の種類)」および「項・参加者タイプ (動作主, 受影物, 手段, 時, 場所などの意味的・文法的役割の種類)」と, それらのタイプに適合する語彙項目が表す具体的な語彙的意味から構成される意味である。Givón (1984: 86) が「命題的意味 *propositional meaning*」と呼んでいる概念に相当する。

(弁別素性, 因子) は「現実事象か非現実事象か」, 「前景事象か背景事象か」, 「2つの事象の関係は直接的か間接的か」という話者の事象の捉え方である。これらの捉え方に応じてタイ語話者は[1]~[4]の4種類の表現を使い分けている。

本稿の構成は以下のとおりである。第2節では, 他動性の程度を異にするタイ語表現について概観する。第3節では, 本稿における他動性, 結果性, 使役性, 契機性の定義について詳しく説明する。第4節では, それらを表すタイ語表現がどのような要素によって関連付けられているのかを論じる。第5節では, 先行研究の誤謬をいくつか指摘する。第6節で結語を述べる。なお, 本稿の例文は筆者の作例である。先行研究に挙げられていたタイ語母語話者による作例を参考にして, 名詞句等の構成素を入れ替えて作ったものが多い。¹³

2. 他動性の程度を異にするタイ語表現

表1は, 主語の意味役割や意味特性の違い(有生物/有情物か, 意図・計画者 *intender* か, 実行者 *performer* か, 影響を及ぼすか, 等々)によってタイ語の表現形式がどのように変わるのかを示している。

¹³ 本稿の作例が適切な表現であるかどうか, タイ語母語話者であるタサニー・メーターピスウィット氏に判断していただいた。不適切であると指摘を受けた例文については, 同氏に改善案を示唆していただき, 修正を施した。ここに記して感謝申し上げます。

表 1: 主語の意味役割や意味特性の違いによるタイ語表現のバリエーション

		主語		
		意図性	実行性	
A	主語が意図・計画者でもあり 実行者でもある : 「彼女は彼を殺した」, 「彼女は彼を殺し彼が死んだ」	Yes	Yes	統語的他動詞構文 (7), 因果動詞句連続構文(8)
B	主語が非意図的な実行者である : 「彼女は気づかずに彼に酷いことをした」, 「彼女は財布に直接何かをし財布が無くなった」 「彼女は刃物に直接何かをし刃物が指を傷つけた」, 「彼女は彼を悲しませた」	No	Yes	統語的他動詞構文 (10), 因果動詞句連続構文(11)(12), 契機接続詞構文(13)
C	主語が影響を及ぼす無生物である : 「火は森を燃やした」, 「風は家に吹き家が崩壊した」, 「熱は氷を溶かした」 「この事件は彼を悲しませた」	No	Yes	統語的他動詞構文 (14), 因果動詞句連続構文(15), 契機接続詞構文(16)(17)
D	主語が意図・計画者であるが 実行者ではない : 「彼女は彼に建物を建てさせた」	Yes	No	分析的使役構文 (18)(19)
E	主語が外的刺激を受けた経験者である : 「彼女は彼を愛した」 「彼女は彼に腹を立てた」, 「彼女はがっかりした」	No	No	統語的他動詞構文 (20)(21), 統語的自動詞構文(22)
F	主語が影響を被らない行為の 受け手である : 「場所が決まった」	No	No	
G	主語が自らの意志で動く実行者である : 「彼女は歩いた」, 「彼女は駅に歩いて行った」, 「彼女は行って駅に着いた」	Yes	Yes	統語的自動詞構文 (23), 動詞連続構文 (24), 因果動詞句連続構文(25)
H	主語が内的刺激を受けた経験者あるいは非意志的な実行者である : 「彼女は腹が空いた」, 「彼女は思わず笑いだした」, 「彼女は笑うのを抑えられなかった」	No	Yes/No ??	統語的自動詞構文 (26), 動詞連続構文 (27), 因果動詞句連続構文(28)
I	主語が位置変化を経るものである : 「花瓶は落ちた」, 「葉は落ちて来た」, 「埃は落ちて降りかかった」	No	No	統語的自動詞構文 (29), 動詞連続構文 (30), 因果動詞句連続構文(31)

J	主語が状態変化を経るものである: 「ガラスは割れた」「彼女は死んだ」「氷は溶けた」, 「水は変化して気体になった」	No	No	統語的自動詞構文(32)(33)(34), 因果動詞句連続構文(35)
K	主語がある属性を備えたものである: 「彼女は美しい」「髪は長い」	No	No	統語的自動詞構文 ¹⁴ (36)(37)

表1の最上段に挙げられているAの事象(主語が意図・計画者でもあり実行者でもある)がもっとも他動性が高く, 下のほうに挙げられているH~Kの事象(主語が内的刺激を受けた経験者あるいは非意志的な実行者である, 主語が位置変化を経るものである, 主語が状態変化を経るものである, 主語がある属性を備えたものである)は他動性が低い。A~Kの事象を表すタイ語の言語形式の具体例を, それぞれ第2.1節~第2.11節に列挙する。

2.1 「A: 主語が意図・計画者であり実行者でもある」

主語の指示物が意図・計画者であり実行者でもあるというAの事象は, タイ語では, 例文(7)のような統語的他動詞構文でも, 例文(8)のような因果動詞句連続構文でも表せる。¹⁵

(7) maanii khâa maaná?
 マーニー 殺す マーナ
 マーニーはマーナを殺した [統語的他動詞構文]

(8) maanii khâa maaná? taay
 マーニー 殺す マーナ 死ぬ
 マーニーはマーナを殺しマーナが死んだ [因果動詞句連続構文]

例文(7)のような統語的他動詞構文が「意図せずに, 故意ではなく, うっかり」といった非意図性を表す副詞表現と共起するかどうかは, その統語的他

¹⁴ 日本語や英語のように形容詞が認められる言語では, Kの事象は形容詞構文で表されるであろう。

¹⁵ 統語的他動詞構文(7)と因果動詞句連続構文(8)の意味の違いについては, 例文(63)と例文(64)の意味の違いについての対比的説明(第3.2節)を参照されたい。統語的他動詞構文(例文(7)(63))が表す「他動性」という概念は第3.1節で, 因果動詞句連続構文(例文(8)(64))が表す「結果性」という概念は第3.2節で, それぞれ詳しく説明されている。

動詞が表す動作の具体性の程度による (タサニー・メーターピスイット氏, 私信)。例えば, 「殺す」という事象を表す動詞でも, 殺し方の特定度の高低によって非意図性を表す副詞表現と共起できるかどうかの容認度が異なってくる。動作の様態を特定しない動詞「khâa ‘殺す’」であれば「意図せずに殺してしまった」と表現することは無理ではない。一方, 動作の様態の特定度が非常に高い動詞「chûat ‘(鶏の頸を切り落とすときのように) 鋭利な刃物でごしごとと深く切り込む’」を使って「意図せずに刃物でごしごとと深く切り込んでしまった」と表現することは難しい。動詞「chûat ‘鋭利な刃物でごしごとと深く切り込む’」と副詞表現「dooy mây tân cay ‘意図せずに’」が組み合わされた例文(9)は極めて不自然な表現である。

- (9) ??maanii chûat khoo kày dooy mây tân cay
マーニー 深く切り込む 首 鶏 意図せずに
(意図する意味) マーニーはうっかり鶏の頸を深く切り込んだ

2.2 「B : 主語が非意図的な実行者である」

主語の指示物が非意図的な実行者であるという B の事象は, タイ語では, 例文(10)のような統語的他動詞構文, 例文(11)(12)のような因果動詞句連続構文, あるいは例文(13)のような契機接続詞構文によって表される。

- (10) maanii tham ráay maaná? dooy mây rúu tua
マーニー 酷いことをする マーナ 気づかずに
マーニーは気づかずにマーナに酷いことをした [統語的他動詞構文]

- (11) maanii tham krapǎw ɲən hǎay
マーニー する 財布 消え失せる
マーニーは財布に直接何かをし (「落とす, 置き忘れる」など)
財布が無くなった
マーニーは財布を無くした [因果動詞句連続構文]

- (12) maanii tham mîit bàat¹⁶ níw
マーニー する 刃物 傷つける 指
マーニーは刃物に直接何かをし（「触る，当たる，動かす」など）
刃物が指を傷つけた [因果動詞句連続構文]
- (13) maanii tham hây maaná? sía cay
マーニー 契機 マーナ 悲しむ
マーニー（の振る舞い）が契機となり「マーナが悲しむ」という
事態を引き起こした
マーニーはマーナを悲しませた [契機接続詞構文]

2.3 「C：主語が影響を及ぼす無生物である」

主語の指示物が影響を及ぼす無生物であるというCの事象は、タイ語では、例文(14)のような統語的他動詞構文，例文(15)のような因果動詞句連続構文，あるいは例文(16)(17)のような契機接続詞構文によって表される。

- (14) fay mây pàa
火 燃やす 森
火は森を燃やした [統語的他動詞構文]

¹⁶ 動詞「bàat」は「自他交替可能動詞」(cf. 第3.1節)である。例文(12)では受影物を表す名詞(指)を後ろに伴い(統語的他動詞となって)「刃物のような鋭利なものが身体部位(例文(12)の場合は「指」)を傷つける」という意味を表しているが、後ろに何も名詞を伴わず(統語的自動詞となって)「身体部位が傷を負う」という意味を表すこともある。例文(12)では「bàat」の後ろに生起している名詞「níw ‘指」の指示物は特定のなもの(特定の人の指)であり、動詞「bàat」の項あるいは補語である(「bàat」は統語的他動詞である)。しかし「bàat」の後ろに生起する名詞は、多くの場合、特定の人の身体部位ではなく、一般に誰もが持っていると考えられるいわば理想化された不特定の身体部位を表す(例えば「bàat cay ‘傷を負う，心」の「cay ‘心」など)。その場合、動詞「bàat」の後ろに添えられた不特定の身体部位を表す名詞は、動詞「bàat」の項あるいは補語ではなく、話者の主観的なものの見方を示唆する副詞のような役割を果たしている(Takahashi 2008)。例えば「kháv bàat cay ‘彼は心が傷を負う；彼は気分を害している」という表現では、「cay ‘心(人間であれば誰にでもあって情意が生じるところと考えられている一般的な心)」の添加によって、「一般に人間は身体部位をときに傷つけるが、話題となっている彼について言えば、心が傷を負っている、すなわち、気分を害している」という話者の主観的な見方が示唆される。「kháv bàat cay ‘彼は心が傷を負う；彼は気分を害している」という表現は厳密な意味で統語的他動詞構文であるとはいえない。

- (15) lom phát bân phan
 風 吹く 家 崩壊する
 風は家に吹き家が崩壊した [因果動詞句連続構文]
- (16) khwaam rón tham hây nám khěj lalaay
 熱 契機 氷 溶ける
 熱 (の発生) が契機となり「氷が溶ける」という事態を引き起こした
 熱は氷を溶かした [契機接続詞構文]
- (17) hêtkaan ní tham hây maaná? sǎ cay
 事件 この 契機 マーナ 悲しむ
 この事件が契機となり「マーナが悲しむ」という事態を引き起こした
 この事件はマーナを悲しませた [契機接続詞構文]

2.4 「D: 主語が意図・計画者であるが実行者ではない」

主語の指示物が意図・計画者であるが実行者ではないという D の事象は、タイ語では、例文(18)(19)のような分析的使役構文によって表される。

- (18) maanii {sǎn / bòk / plǎy} maaná? hây
 マーニー {命じる / 伝える / 放任する} マーナ 使役
 (kháw) sǎn tùk
 (彼) 建てる 建物
 マーニーは (彼=マーナが) 建物を建てるように {マーナに命じた / マーナに伝えた / マーナを放任した}
 マーニーは {マーナに命じ / マーナに伝え / マーナを放任し} (彼=マーナに) 建物を建てさせた [分析的使役構文]
- (19) maanii {sǎn / bòk / plǎy} hây maaná?
 マーニー {命じる / 伝える / 放任する} 使役 マーナ
 sǎn tùk
 建てる 建物
 マーニーはマーナが建物を建てるように {命じた / 伝えた / 放任

した}

マーニーは {命じ / 伝え / 放任し} マーナに建物を建てさせた [分析的使役構文]

例文(18)では、統語的他動詞の後ろに名詞 (マーナ) が生起しているが、例文(19)では、その位置には使役標識 *hây* が生起し、使役標識の後ろに名詞 (マーナ) が生起している。¹⁷

2.5 「E: 主語が外的刺激を受けた経験者である」

主語の指示物が外的刺激を受けた経験者であるという E の事象は、タイ語では、例文(20)(21)のような統語的他動詞構文、あるいは例文(22)のような統語的自動詞構文によって表される。

¹⁷ Noss (1964: 177-178) の見解では、機能語 *hây* は、前置詞、後置詞としての機能の他に、‘so that, who should, which should, the hypothetical situation that’ という意味の接続詞としての機能を持つ。接続詞 *hây* が導く補語は非現実事象を表す; “In commands and all types of hypothetical situations, and in noun expressions involving unreal referents, /hây/ is selected.” (ibid.: 177)。動詞「*bòk* ‘伝える’」と接続詞 *hây* を含む 2 種類の分析的使役構文(ii)(iii) (それぞれ例文(18)のタイプと例文(19)のタイプに対応する) の意味の違いについて、Noss は次のように説明する (逐語訳は筆者が加えた)。

(ii) *phǒm* *bòk* *khun* *hây* *pay* *duu* *sí?*
I tell you CONJUNCTION go look PARTICLE
I told you to go take a look. (Indirect, but you were present.)

(iii) *phǒm* *bòk* *hây* *khun* *pay* *duu* *sí?*
I tell CONJUNCTION you go look PARTICLE
I said for you to go take a look. (Indirect quote; you may not even have been present.)

動詞「伝える」の後ろに名詞句「あなた」が生起している例文(ii)では、「あなた」は「伝える」行為の対象としてその「伝える」行為が起こった場にいたと考えられる。一方、動詞「伝える」の後ろに名詞句「あなた」がない例文(iii)では、「あなた」は「伝える」行為が起こった場にいなかったかもしれない。いずれにせよ、非現実事象補語を導く接続詞 *hây* を含む例文(ii)(iii)は、何らかの言い方で補語の内容を意向として相手に伝えたことを表す (間接 *indirect* 表現)。一方、接続詞 *wâa* ‘that, saying, thinking, or knowing that’ を含む例文(iv)(v) は、補語で述べられているとおりの言い方で相手に意向を伝えたことを表す (直接 *direct* 表現)。

(iv) *phǒm* *bòk* *khun* *wâa* *pay* *duu* *sí?*
I tell you CONJUNCTION go look PARTICLE
I told you, ‘Go take a look.’ (Direct)

(v) *phǒm* *bòk* *wâa* *khun* *pay* *duu* *sí?*
I tell CONJUNCTION you go look PARTICLE
I said, ‘You go take a look.’ (Direct quote)

(20) maanii rák maaná?
マーニー 愛する マーナ
マーニーはマーナを愛した [統語的他動詞構文]

(21) maanii kròot maaná?
マーニー 怒る マーナ
マーニーはマーナに腹を立てた [統語的他動詞構文]

(22) maanii thóo thée
マーニー がっかりする
マーニーはがっかりした [統語的自動詞構文]

2.6 「F：主語が影響を被らない行為の受け手である」

タイ語では、受影物を主語にする（受動標識を使って分析的受動構文にする）ことはあっても、影響を被らない行為の受け手を主語にすることはない。したがってタイ語には「場所が決まった、荷物が届いた、財布が見つかった、魚が釣れた、お茶が入った」といった類のFの事象（主語が影響を被らない行為の受け手である）を表す形式はない。

2.7 「G：主語が自らの意志で動く実行者である」

主語の指示物が自らの意志で動く実行者であるというGの事象は、タイ語では、例文(23)のような統語的自動詞構文、例文(24)のような複数の動詞が共起した動詞連続構文、あるいは例文(25)のような因果動詞句連続構文（先行する移動事象と後続する到着事象に因果関係を認め、移動事象を背景化し到着事象を前景化した「到着表現」（Takahashi 2009b））によって表される。

(23) maanii dæən
マーニー 歩く
マーニーは歩いた [統語的自動詞構文]

- (24) maanii dæən pay (yaŋ)¹⁸ sathǎanii rót fay
マーニー 歩く 行く (着点) 駅
マーニーは駅に歩いて行った

¹⁸ 例文(24)の着点前置詞「yaŋ‘(着点)に、へ」を括弧に入れたのは、着点前置詞は使われない場合が多いからである。特に日常の話し言葉では、着点を表す場所名詞「sathǎanii rót fay‘駅」が直接、最後の動詞「pay‘行く」に後続することが多い。その場合、動詞「pay‘行く」は名詞「sathǎanii rót fay‘駅」を直接補語にとる (cf. 峰岸 1988: 91-92, 三上 2002: 78-79) と分析されることがある。峰岸 (1988: 92) は、タイ語を含む孤立語の動詞がとるそのような「直接補語」を「動詞の表す動作に関して、意味的にみて不可欠であり、かつ、選択可能な文成分」と定義する。例えば「食べる」という動作であれば、その動作の対象は「御飯」「麺」「パン」など選択可能である。また、その動作の道具・手段も「フォークとスプーン」「箸」「手」など選択可能である。そのため、タイ語の動詞「kin‘食べる」は、食べる対象である「khǎaw‘御飯」を直接補語にとることもできれば (「kin khǎaw‘御飯を食べる」)、食べる道具・手段である「muu‘手」を直接補語にとることもできる (「kin muu‘手で食べる」)。「pay‘行く」も同様に、移動の着点である「chianǵ mày‘チェンマイ」を直接補語にとることもできれば (「pay chianǵ mày‘チェンマイに行く」)、移動の道具・手段である「rót fay‘汽車」を直接補語にとることもできる (「pay rót fay‘汽車で行く」)。ここで考慮すべきは、そうした表現の動詞と名詞の結び付きの程度は個々の具体例で異なり得るということである。三上 (2002: 79) が指摘するように、例えば「pay‘行く」と「rooŋ rian‘学校」が直接結び付いた表現「pay rooŋ rian‘学校に行く」は、単に「学校という場所に行く」ことではなく、習慣的な「学校に勉強しに行く、学校に教えに行く」ことを表す。すなわち、意味的・統語的に固定化した慣用表現の度合いが高い。筆者の考えでは、その場合の名詞「rooŋ rian‘学校」の意味は総称的、非指示的、非特定のである (cf. Jarkey 氏の論考「白モン語における他動性」の第 4.5 節, 第 5.2 節)。その場合の「rooŋ rian‘学校」はいわば付加詞のような副詞的役割を果たしており (cf. 注 16)、したがって「pay rooŋ rian‘学校に行く」は厳密な意味で統語的他動詞構文であるとはいえない。しかし慣用度がそれほど高くない「pay sathǎanii rót fay‘駅に行く」のような表現の場合は、動詞「pay‘行く」に添えられている名詞「sathǎanii rót fay‘駅」が総称的、非指示的、非特定のなのか (付加詞的な副詞か)、あるいは個別的、指示的、特定のなのか (直接補語名詞か)、判断が難しい。発話時の談話文脈上の前提がわからなければ (語用論的な知識がなければ) 判断することができない。言い換えれば、「pay sathǎanii rót fay‘駅に行く」のような表現を統語的他動詞構文と見るのか、あるいは統語的自動詞構文と見るのか、その判断は語用論レベルの解釈に頼らざるを得ない。注 8 で述べたようにタイ語表現の他動性の高低 (他動詞・自動詞の区別) について論じることが本稿の主たる目的ではないので、「pay rooŋ rian‘学校に行く」や「pay sathǎanii rót fay‘駅に行く」といった表現の「pay‘行く」が他動詞か自動詞かという判断は本稿では保留する。

(25) maanii (dæən)¹⁹ pay thǔŋ sathǎanii rót fay

マーニー (歩く) 行く 着く 駅

マーニーは (歩いて) 行って駅に着いた [因果動詞句連続構文]

2.8 「H: 主語が内的刺激を受けた経験者あるいは非意志的な実行者である」

主語の指示物が内的刺激を受けた経験者あるいは非意志的な実行者であるという H の事象は、タイ語では、例文(26)のような統語的自動詞構文、例文(27)のような複数の動詞で構成される動詞連続構文、あるいは例文(28)のような因果動詞句連続構文によって表される。

(26) maanii hǐw²⁰

マーニー ひもじい

マーニーは腹が空いた [統語的自動詞構文]

(27) maanii phlǎə hǔaró? ʔòk maa

マーニー 油断する 笑う 出る 来る

マーニーは思わず笑いだした

¹⁹ 例文(25)の移動の様態を表す様態動詞「dæən ‘歩く」」を括弧に入れたのは、「dæən ‘歩く」」がなくても例文(25)の到着表現は成立するからである (maanii pay thǔŋ sathǎanii rót fay ‘マーニー, 行く, 着く, 駅; マーニーは行って駅に着いた’)。一方, 移動の経路を表す直示動詞「pay ‘行く」」のほうは例文(25)の到着表現から削除することができない。例文(25)から「pay ‘行く」」を削除した表現 (? maanii dæən thǔŋ sathǎanii rót fay ‘マーニー, 歩く, 着く, 駅’) は, 条件節などでなければ, 通常容認されない (Takahashi 1997)。

²⁰ 例文(26)の状態動詞「hǐw ‘ひもじい」」には「khâaw ‘米」」「nám ‘水」」「bùrii ‘タバコ」」などの欲求の対象を表す名詞が直接後続することがある (‘hǐw khâaw ‘御飯が食べたい」」「hǐw nám ‘水が飲みたい」」「hǐw bùrii ‘タバコが吸いたい」」など)。「hǐw ‘ひもじい」」が表す述語タイプは動作ではなくある種の状態 (欲求) ではあるが, そうした状態に関して「意味的にみて不可欠であり, かつ, 選択可能な文成分 (峰岸 1988: 92)」として, 欲求の対象を表す名詞を動詞「hǐw ‘ひもじい」」の「直接補語」と捉えることができるかもしれない。しかし「hǐw ‘ひもじい」」に添えられる「khâaw ‘米」」「nám ‘水」」「bùrii ‘タバコ」」などの名詞は総称的, 非指示的, 非特定のである場合が多い。その場合, 「hǐw khâaw ‘御飯が食べたい」」「hǐw nám ‘水が飲みたい」」「hǐw bùrii ‘タバコが吸いたい」」といった表現は厳密な意味で統語的他動詞構文であるとはいえない (cf. 注 18)。

- (28) maanii klân hǔarǒ? mây yùu
マーニー 抑える 笑う 否定 いる
マーニーは笑うのを抑え持続しなかった
マーニーは笑うのを抑えられなかった [因果動詞句連続構文]

2.9 「I: 主語が位置変化を経るものである」

主語の指示物が、Gの主語の指示物のような自らの意志で動く実行者ではないが、位置変化を経るものであるというIの事象は、タイ語では、例文(29)のような統語的自動詞構文、例文(30)のような動詞連続構文、あるいは例文(31)のような因果動詞句連続構文によって表される。

- (29) cεεkan tòk²¹
花瓶 落ちる
花瓶は落ちた [統語的自動詞構文]
- (30) bay máy rûaŋ loŋ maa
葉 落ちる 下る 来る
葉は落ちて来た
- (31) khîi fùn lòn sày hǔa
埃 落ちる 降りかかる 頭
埃は落ちて頭に降りかかった [因果動詞句連続構文]

2.10 「J: 主語が状態変化を経るものである」

主語の指示物が状態変化を経るものであるというJの事象は、タイ語では、

²¹ 例文(29)の動詞「tòk ‘落ちる’」も、例文(24)の「pay ‘行く’」や例文(26)の「hǐw ‘ひもじい’」と同様、後ろに名詞を伴うことがある。その名詞が表すのは、起点「tó? ‘机’」(「tòk tó? ‘机から落ちる’」)、経路「banday ‘階段’」(「tòk banday ‘階段を落ちる’」)、着点「nám ‘水’」(「tòk nám ‘水に落ちる’」)、あたかも転げ落ちてしまったかのように乗れなかったもの「rót ‘車’」(「tòk rót ‘車から落ちる；車に乗り遅れる’」)、落ちたもの「khày ‘卵’」(「tòk khày ‘卵が落ちる；産卵する’」)などである。「tòk ‘落ちる’」に添えられるそのような名詞は総称的、非指示的、非特定のである場合が多い。その場合、「tòk tó? ‘机から落ちる’」「tòk banday ‘階段を落ちる’」「tòk nám ‘水に落ちる’」「tòk rót ‘車から落ちる；車に乗り遅れる’」「tòk khày ‘卵が落ちる；産卵する’」といった表現は厳密な意味で統語的他動詞構文であるとはいえない (cf. 注 18, 注 20)。

例文(32)(33)(34)のような統語的自動詞構文, あるいは例文(35)のような因果動詞句連続構文によって表される。

(32) kêew tɛ̀ɛk

ガラス 割れる

ガラスは割れた [統語的自動詞構文]

(33) maanii taay

マーニー 死ぬ

マーニーは死んだ [統語的自動詞構文]

(34) nám khěŋ lalaay

氷 溶ける

氷は溶けた [統語的自動詞構文]

(35) nám klaay pen ʔay

水 変化する なる 気体

水は変化して気体になった (気化した) [因果動詞句連続構文]

2.11 「K : 主語がある属性を備えたものである」

主語の指示物がある属性を備えたものであるという K の事象は, タイ語では, 例文(36)(37)のような統語的自動詞構文によって表される。

(36) maanii sǔay

マーニー 美しい

マーニーは美しい [統語的自動詞構文]

(37) phǒm yaaw

髪 長い

髪は長い [統語的自動詞構文]

2.12 タイ語の他動性や使役性にかかわる表現の全般的特徴

本節の冒頭に掲げた表 1 (主語の意味役割や意味特性の違いによるタイ語表現のバリエーション) から, タイ語の他動性や使役性にかかわる表現の全般的特徴として, 次のことが読み取れる。

(a) F の事象 (主語が影響を被らない行為の受け手である) を表すタイ語の

表現形式はない。

(b) D の事象 (主語が意図・計画者であるが実行者ではない) は専ら分析的使役構文によって表される。

(c) K の事象 (主語がある属性を備えたものである) は専ら統語的自動詞構文によって表される。

(d) E の事象 (主語が外的刺激を受けた経験者である) は統語的他動詞構文あるいは統語的自動詞構文によって表される。

(e) 分析的使役構文でしか表すことのできない D の事象 (主語が意図・計画者であるが実行者ではない) を除き, E より上の比較的他動性の高い事象 (A: 主語が意図・計画者でもあり実行者でもある, B: 主語が非意図的な実行者である, C: 主語が影響を及ぼす無生物である, E: 主語が外的刺激を受けた経験者である) は統語的他動詞構文によって表される。

(f) タイ語で表現されない F の事象 (主語が影響を被らない行為の受け手である) を除き, E より下の他動性の低い事象 (E: 主語が外的刺激を受けた経験者である, G: 主語が自らの意志で動く実行者である, H: 主語が内的刺激を受けた経験者あるいは非意志的な実行者である, I: 主語が位置変化を経るものである, J: 主語が状態変化を経るものである, K: 主語がある属性を備えたものである) は統語的自動詞構文によって表される。

(g) 統語的他動詞構文あるいは統語的自動詞構文でしか表すことのできない E の事象 (主語が外的刺激を受けた経験者である) と統語的自動詞構文でしか表すことのできない K の事象 (主語がある属性を備えたものである) を除き, (e) と (f) で挙げた統語的他動詞構文および統語的自動詞構文で表される事象 (A: 主語が意図・計画者でもあり実行者でもある, B: 主語が非意図的な実行者である, C: 主語が影響を及ぼす無生物である; G: 主語が自らの意志で動く実行者である, H: 主語が内的刺激を受けた経験者あるいは非意志的な実行者である, I: 主語が位置変化を経るものである, J: 主語が状態変化を経るものである) はその他の構文 (因果動詞句連続構文や契機接続詞構文) でも表すことができる。

表 1 の右端の欄に挙げられている構文の中で, 主語の種類が 1 つに定まっているのは D の事象 (主語が意図・計画者であるが実行者ではない) を表す

分析的使役構文だけである。それ以外の構文（統語的自動詞構文，統語的他動詞構文，因果動詞句連続構文，契機接続詞構文）は複数の種類の主語を容認する。このことから，主語の種類だけでどの構文を使うべきかが決まるわけではないことがわかる。

これらの構文の使い分けを左右する基本的な要素は，抽象的，図式的な意味での，話者による当該事象の概念化の仕方と当該発話場面における話者の発話意図の在り方である。話者がその事象の内部構造をどう捉え，その事象を聞き手にどう伝えたいのかによって使われる構文が変わる。例えば，タイ語で「マーニーがマーナを殺す，マーニーの行為によってマーナが死ぬ」という事象を伝えるとき，話者の事象の捉え方や伝えたい内容の違いによって，以下のような異なる表現の仕方が可能だ。

(38) maanii khâa maaná?

マーニー 殺す マーナ

マーニーはマーナを殺した

<直接使役> [他動性表現]

(39) maanii khâa maaná? taay

マーニー 殺す マーナ 死ぬ

マーニーはマーナを殺しマーナが死んだ

<直接使役> [結果性表現]

(40) maanii plòy maaná? hây (kháw)

マーニー 放任する マーナ 誘発 (彼)

taay

死ぬ

マーニーは (彼=マーナが) 死ぬようにマーナを放任した

マーニーはマーナを放任し (彼=マーナを) 死なせた

(41) maanii plòy hây maaná? taay

マーニー 放任する 誘発 マーナ 死ぬ

マーニーはマーナが死ぬように放任した

マーニーは放任しマーナを死なせた

(42) maanii tham hây maaná? taay

マーニー 契機 マーナ 死ぬ

マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが死ぬ」という事態を引き起こした

マーニーはマーナを死なせた

<間接誘発> [契機性表現]

もし、マーニーが何らかの形で関与し、マーナが自らの意志で自殺したのであれば、以下のような表現が可能だ。

(43) maanii {sàŋ / bòok / plòy} maaná? hây

マーニー {命じる / 伝える / 放任する} マーナ 使役

(kháw) khâa tua taay

(彼) 自殺する

マーニーは (彼=マーナが) 自殺するように {マーナに命じた / マーナに伝えた / マーナを放任した}

マーニーは {マーナに命じ / マーナに伝え / マーナを放任し} (彼=マーナを) 自殺させた

<間接使役> [使役性表現]

(44) maanii {sàŋ / bòok / plòy} hây maaná?

マーニー {命じる / 伝える / 放任する} 使役 マーナ

khâa tua taay

自殺する

マーニーはマーナが自殺するように {命じた / 伝えた / 放任した}

マーニーは {命じ / 伝え / 放任し} マーナを自殺させた

<間接使役> [使役性表現]

(45) maanii tham hây maaná? khâa tua taay

マーニー 契機 マーナ 自殺する

マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが自殺する」という事態を引き起こした

マーニーはマーナを自殺させた

<間接誘発> [契機性表現]

このように、タイ語の他動性や使役性にかかわる表現は実に多様である。本稿では、タイ語話者がこれらの表現をどのように使い分けているのかを明示的に示し、それぞれの表現（構文）の意味機能を詳述する。

3. 他動性, 結果性, 使役性, 契機性の定義

次節でタイ語の他動性表現（統語的他動詞構文, 統語的自動詞構文）、結果性表現（因果動詞句連続構文）、使役性表現（分析的使役構文）、契機性表現（契機接続詞構文）の体系について詳しく論じるが、その前にまず、本稿における「他動性」、「結果性」、「使役性」、「契機性」という用語の定義を述べておきたい。

3.1 他動性

他動性とは、基本的には動詞が持つ語彙的意味であり、内容語に固有の実質的意味の一種である。もう少し広く捉えれば、動詞を核とする節が表すいわゆる命題レベルの意味 (cf. 注 12) である。他動性のプロトタイプ（基本他動性）は動作主と受影物が関与する直接使役（動作主の直接的行為によって、その動作主の期待通りに、受影物が変化や影響を被る）であり、例文(46)～(49)のような統語的他動詞構文で表される。

- (46) maanii khâa maaná?
マーニー 殺す マーナ
マーニーはマーナを殺した [他動性表現]
- (47) maanii chiik kradàat
マーニー 破る 紙
マーニーは紙を破った [他動性表現]
- (48) maanii thúp ?it
マーニー 金槌などで叩きつける 煉瓦
マーニーは煉瓦を叩きつけた [他動性表現]

- (49) maanii sâaŋ tùk
マーニー 建てる 建物

マーニーは建物を建てた [他動性表現]

動作主の意志的行為（「殺す，破る，叩く，建てる」など）とその行為によって引き起こされる受影物の変化（「死ぬ，破れる，砕ける，建つ」など）が切り離せない関係にあり，1つの事象の表裏の関係であると捉えるとき，タイ語話者は統語的他動詞構文を使う。

よく知られているように，統語的他動詞構文が表す事象の参与者（基本他動性事象の場合，典型的には動作主と受影物）の意味素性（動作主の意志性，動作主の制御性，動作主の有責任性，受影物の受影性，受影物の個別性など）は，事象自体の意味素性（動態性，限界性，瞬間性など）とともに，他動性といういわゆる命題レベルの意味を分析するのに有効な概念である（e.g. Hopper & Thompson 1980, Lakoff 1977, Tsunoda 1985）。例えば，例文(50)～(53)に見られるようなタイ語の受動形式の違いは，主語が表す受影物の受影性についての質的な違い（好ましくない影響を受ける，好ましい影響を受ける，新たに作り出される，心的態度の対象になる）を反映しているのだが，それぞれの例文で使用されている統語的他動詞の他動性の違いを多少なりとも反映している。

- (50) bâan nán thùuk (maanii) thamlaay
家 あの 受動 (マーニー) 壊す
あの家は「(マーニーが) 壊す」という事態を被った
あの家は (マーニーに) 壊された

- (51) maaná? dây ráp kaan chûay lǔa (càak maanii)
マーナ 受ける 名詞化 援助する (起点 マーニー)
マーナは (マーニーから) 援助を受けた
マーナは (マーニーに) 助けられた

- (52) tùk níi sâaŋ dooy maanii
建物 この 建てる ～によって マーニー
この建物はマーニーによって建った
この建物はマーニーによって建てられた

- (53) maanáʔ pen thîi rák khǒɔŋ maanii
 マーナ 繫辞 補語 愛する 所有 マーニー
 マーナはマーニーの愛するところであった
 マーナはマーニーに愛された

こうした受動形式の違いからタイ語の統語的他動詞は、表 2 に挙げた通り、①「加害動詞」、②「支援動詞」、③「創出動詞」、④「態度動詞」、⑤「知覚動詞、所有動詞」の 5 種類に大きく分類することができる (メーターピスィット 2000)。²²

表 2: タイ語の統語的他動詞の下位分類(メーターピスィット 2000)

高い他動性を持つ統語的他動詞: 受動形式を持つ [+限界性, +意志性, +受影性]	①加害動詞 (e.g. <i>thamlaay</i> ‘壊す’) (50) ②支援動詞 (e.g. <i>chûay lǔa</i> ‘援助する’) (51) ③創出動詞 (e.g. <i>sâaŋ</i> ‘創る, 建てる’) (52)
比較的低い他動性を持つ統語的 他動詞: 受動形式を持つ [-限界性, -意志性, -受影性]	④態度動詞 (e.g. <i>rák</i> ‘愛する’) (53)
低い他動性を持つ統語的他動詞: 受動形式を持たない [-限界性, -意志性, -受影性]	⑤知覚動詞 (e.g. <i>hěn</i> ‘見える’) 所有動詞 (i.e. <i>mii</i> ‘所有する (<人のもと に事物が存在する) ’)

受動形式を持たない⑤がもっとも他動性が低く、受動形式を持つ①～④の中では、④が①、②、③より他動性が低いといえる。なぜなら、「限界性、意

²² ただし、ひとつの統語的他動詞が必ず①～⑤の中のどれかひとつの種類に属しているというわけではない。受影物の受影性の質について複数の解釈を許し、複数の種類にまたがる動詞も少なくない。例えば、「*fùk fǒn* ‘訓練する’」という動詞は、「訓練という好ましくない事態を被った」とも「訓練という好ましい事態を受けた」とも言えるので、①「加害動詞」と②「支援動詞」のどちらにも分類できる。「*khawróp* ‘尊敬する’」という動詞は、「尊敬という好ましい事態を受けた」とも「人々の尊敬するところであった」とも言えるので、②「支援動詞」と④「態度動詞」のどちらにも分類できる。「*thòk thǎaŋ* ‘論争する’」という動詞は、「論争という好ましくない事態を被った」とも「論争という好ましい事態を受けた」とも「人々の論争するところであった」とも言えるので、①「加害動詞」、②「支援動詞」、④「態度動詞」のいずれにも分類できる。

志性, 受影性²³」という他動性因子の値について考えてみると, ①の動詞が表す加害事象(「壊す, 殺す, 叱る」など), ②の動詞が表す支援事象(「援助する, 保護する, 褒める」など), ③の動詞が表す創出事象(「創る, 催す, 解説する」など)は, それらの他動性因子について正の値を持つが, ④の動詞が表す態度事象(「愛する, 期待する, 満足する」など)は, ⑤の動詞が表す知覚事象(「見える, 聞こえる」など)や所有事象(「所有する(＜人のもとに事物が存在する)」)と同様, それらの他動性因子について負の値を持つからである。

また, タイ語の統語的他動詞は, 対応する意味を持つ統語的自動詞と統語的他動詞の形が同じか否かという観点から, 自他同形の「自他交替可能動詞」(pəət ‘開ける’, mǔn ‘回す’, hək ‘折る’ など; e.g. 統語的他動詞構文「kháw pəət pratuu ‘彼, 開ける, 扉; 彼は扉を開ける」)と統語的自動詞構文「pratuu pəət ‘扉, 開く; 扉は開く」)に使われる動詞「pəət ‘開ける, 開く」が同じ形を持つ)と自他異形の「自他交替不可能動詞」(e.g. khâa ‘殺す’, tii ‘叩く’ など; e.g. 統語的他動詞構文「kháw khâa mǎa ‘彼, 殺す, 犬; 彼は犬を殺す」)と統語的自動詞構文「mǎa taay ‘犬, 死ぬ; 犬は死ぬ」)に使われる動詞「khâa ‘殺す’, taay ‘死ぬ」が異なる形を持つ)の2種類に大きく分けることができる(坂本 1985, Thepkanjana 2000, Wongsantiwanich 1983)。しかしこの分類は, 表2の分類と異なり, 他動性の高低を直接反映するものではない。「自他交替可能動詞」対「自他交替不可能動詞」の対立は, 動詞が表す事象の理想的概念構造である「使役連鎖」(Croft 1990, 1994, 1998)の始点に位置する原因事象(典型的参加者は動作主)と終点に位置する結果事象(典型的参加者は受影物)の両者が焦点化されるのか, それとも原因事象だけが焦点化されるのか, ということと関係がある(Thepkanjana 2000)。

自他交替可能動詞は, 原因事象(「開ける」などの動作主の行為)から結

²³ 高い他動性を持つ(すなわち, 受動形式を持ち, 限界性, 意志性, 受影性という他動性因子について正の値を持つ)①～③の動詞の中で, ②支援動詞の「褒める」や③創出動詞の「解説する」などは, ①加害動詞に比べて, 受影性の程度がそれほど高くない(ネリダ・ジャーキー氏, 私信)。したがって, ①加害動詞をもっとも他動性が高い統語的他動詞とし, ②支援動詞と③創出動詞をその次に他動性が高い統語的他動詞として区別する, つまり①～③の動詞をさらに細かく下位分類することも可能である。

果事象（「開く」などの受影物の変化）に至るまでの使役連鎖の全体を描写対象とし、その全体に焦点を当てる動詞である。自他交替可能動詞が表す事象では、受影物の変化の原因は必ず、動作主の行為や自然の力など、受影物の外部になければならない。したがって自他交替可能動詞には、内的要因によって状態変化を経る事象（「死ぬ、溶ける」など）を表す統語的自動詞用法はない。自他交替可能動詞の統語的自動詞用法が表す事象（「開く、回る、折れる」など）は、背景に動作主が存在することを含意する「よく売れる、よく切れる」といった中間態の事象に近いといえるかもしれない。一方、自他交替不可能動詞は、自他交替可能動詞と同じく使役連鎖の全体を描写対象とする動詞であるが、自他交替可能動詞と異なり、結果事象（「死ぬ」などの受影物の変化）には焦点を当てず、原因事象（「殺す」などの動作主の行為）のみに焦点を当てる。

このように、統語的他動詞（「開ける、動かす、殺す、叩く」など）は、原因事象と結果事象を含む使役連鎖全体を描写対象とし、原因事象と結果事象の両方を焦点化する場合もあれば（「開ける、動かす」などの自他交替可能動詞の場合）、原因事象のみを焦点化する（したがって結果事象は背景化される）場合もある（「殺す、叩く」などの自他交替不可能動詞の場合）。それに対し、統語的自動詞（「開く、動く、死ぬ、壊れる」など）は、使役連鎖の原因事象の部分を描写対象に含めず、結果事象の部分（変化、状態）のみを描写対象として焦点化する。

3.2 結果性

結果性とは、ある出来事を何かを背景とした合理的な帰結と捉えたときの意味であり、いわゆる命題レベルの意味ではない。言語使用者の解釈に支えられた意味（語用論レベルの解釈を常に伴う意味）である。結果性のプロトタイプは「当該の語用論的、物理的、社会的、文化的文脈の中での自然の帰結」であり、タイ語では例文(54)~(62)のように原因事象を表す先行動詞句と結果事象を表す後続動詞句の2つの動詞句が結び付いた因果動詞句連続構文

²⁴によって表される。

(54) maanii khâa maaná? taay

マーニー 殺す マーナ 死ぬ

マーニーはマーナを殺しマーナが死んだ [結果性表現]

(55) maanii khâa maaná? mây taay

マーニー 殺す マーナ 否定 死ぬ

マーニーはマーナを殺しマーナが死ななかった [結果性表現]

(56) maanii thúp ?it tɛɛk

マーニー 金槌などで叩きつける 煉瓦 割れる

マーニーは煉瓦を叩きつけ煉瓦が割れた [結果性表現]

²⁴ タイ語の因果動詞句連続構文(「達成構文 accomplishment constructions」(Takahashi 2007))の意味的特徴, 統語的特徴は以下のとおりである。①同構文の統語構造は, Rappaport Hovav & Levin (2001)の統語的分類に従うと, 以下のように大きく3つのタイプに分類することができる。(a) “transitive-based”, “object-oriented” タイプ: 先行動詞は目的語をとり, 後続動詞は先行動詞の目的語の述語となる (e.g. khâw chây nɔn mət ‘彼, 使う, お金, 尽きる; 彼はお金を使ってお金が尽きる’)。 (b) “transitive-based”, “subject-oriented” タイプ: 先行動詞は目的語をとり, 後続動詞は先行動詞の主語の述語となる (e.g. khâw kin lâw maw ‘彼, 飲む, 酒, 酔う; 彼は酒を飲んで酔う’)。 (c) “intransitive-based”, “subject-oriented” タイプ: 先行動詞は目的語をとらず, 後続動詞は先行動詞の主語の述語となる (e.g. cɛɛkan tɔk tɛɛk ‘花瓶, 落ちる, 割れる; 花瓶は落ちて割れる’)。②同構文を使って事象を表現する者(あるいは概念を形成する者)は「当該状況において, 当該原因事象の生起を前提として, どのような結果事象が生起するのか」ということに関心がある。③同構文の主語の指示物は動作主であってもなくてもよく, たとえ動作主であっても, その動作主は意図的に行動しているとは限らない。原因事象が動作主の行為である場合, その動作主が結果事象の生起の可能性を完全に支配しているわけではなく, 結果事象がどうなるのかは当該状況次第である。だからこそ「どのような結果事象が生起するのか」を問題とすることができる。④結果事象は, 動的な原因事象に続いて生起する「破壊, 消滅, 蓄積結果, 知覚, 状態変化, 位置変化」などの事象であり, それらの事象は「当該文脈の中での自然の帰結」と総称できる。結果事象は単純アスペクト(状態相, 活動相, 過程相, 到達相)のどのタイプでも構わないが, 原因事象は結果事象が生起するまで持続する事象でなければならない(到達相ではあり得ない)。⑤動詞句2つから成る同構文は構文全体として複合的に達成相を表す。そのため, 単独では進行相標識 kamlaŋ や継続相標識 yùu と共起できる動詞(活動動詞, 過程動詞, 状態動詞)であっても, 同構文の構成素として使われているときにはそれらの標識とは共起できない。⑥通常, 否定辞 mây は原因事象を表す先行動詞句と結果事象を表す後続動詞句の間に生起し, 後者のみが否定の作用域に入る。この構文を使う者の関心は「原因事象の生起を前提として, 結果事象が生起するのかしないのか」という点にあるからである。

- (57) maanii thúp ?it mây tɛ̀k
マーニー 金槌などで叩きつける 煉瓦 否定 割れる
マーニーは煉瓦を叩きつけ煉瓦が割れなかった [結果性表現]
- (58) lom phát bân phan
風 吹く 家 崩壊する
風は家に吹き家が崩壊した [結果性表現]
- (59) lom phát bân mây phan
風 吹く 家 否定 崩壊する
風は家に吹き家が崩壊しなかった [結果性表現]
- (60) maanii mɔ̀ŋ hɛ̀n maaná?
マーニー 見る 見える マーナ
マーニーは見てマーナが見えた [結果性表現]
- (61) maanii mɔ̀ŋ mây hɛ̀n maaná?
マーニー 見る 否定 見える マーナ
マーニーは見てマーナが見えなかった [結果性表現]²⁵
- (62) maanii pə̀ət pratuu ?òk maa
マーニー 開ける 扉 出る 来る
マーニーは扉を開け扉が外の方且つ特定の参照点に近づく方向に動いた
マーニーは扉を開け扉が開いた [結果性表現]²⁶

²⁵ 例文(60)(61)は、他の例文と異なり、先行動詞が名詞句を従えていない。しかし「maanii mɔ̀ŋ maaná? mây hɛ̀n ‘マーニー、見る、マーナ、否定、見える；マーニーはマーナを見て見えなかった（マーナを目で追ったが見えなかった）’」のように先行動詞（見る）が名詞句（マーナ）を従えることもある。また、「maanii mɔ̀ŋ khâŋ nòk hɛ̀n maaná? ‘マーニー、見る、外、見える、マーナ；マーニーは外を見てマーナが見えた’」のように先行動詞（見る）と後続動詞（見える）が異なる名詞句（外、マーナ）を従えることも可能である。先行動詞が何らかの名詞句を従える場合、先行動詞と後続動詞が名詞句を介さず結び付いている場合より、先行動詞句で表される事象と後続動詞句で表される事象の統合度が弱いといえるかもしれない。先行動詞と後続動詞が直接結び付いている表現（例文(60)など）は白モン語の到達 SVC (Attainment SVC) に似ており、先行動詞と後続動詞の間に名詞句が介在する表現（例文(54)(56)(58)(62)など）は白モン語の軸 SVC (Pivotal SVC) に似ているといえるかもしれない（ネリダ・ジャーキー氏、私信）。

²⁶ タサニー・メーターピスィット氏（私信）によると、例文(62)から直示動詞「maa ‘来る’」

例文(54)～(59)では自他交替不可能な動詞「殺す, 吹く, 叩く」と動作主の意志性が関与しない事象を表す統語的自動詞「死ぬ, 崩壊する, 割れる」が組み合わされている。例文(60)(61)では自他交替不可能な動詞「見る」と他動性の低い統語的他動詞「見える」が組み合わされている。例文(62)では自他交替可能な動詞「開ける」と動作主の意志性が関与しない事象を表す統語的自動詞「出る, 来る」が組み合わされている。このように, 因果動詞句連続構文の後続動詞句には動作主の意志性が関与しない事象を表す統語的自動詞や他動性の低い統語的他動詞が生起することが多いが, 動作主の意志性が関与する事象を表す統語的自動詞(「走る」など)や他動性の高い統語的他動詞(「傷つける」など)も, もしそれが制御不可能な行為や動き(「驚かされて思わず走り出す, 当たった刃物が指を傷つける」など)を表すのであれば, 生起できる。

2つの動詞句で表される2つの実質的な事象の間に因果関係を認めるだけでなく, つまり単に一方が原因事象でもう一方が結果事象であると捉えるだけでなく, 原因事象を背景として生じた結果事象に焦点を当てて前景化し, 原因事象と結果事象を1つのまとまりのある事象として捉えるとき, タイ語話者は因果動詞句連続構文を使う。言い換えれば, 因果動詞句連続構文が使われるのは「ある原因事象を背景として, 結果事象が生起するのかわらないのか」ということが問題となっているときである。例えば, 統語的他動詞構文(63)と因果動詞句連続構文(64)は物理的には同一の事象を表現しているのか

を削除した例文(vi)は, 動作主の恒常的属性(能力)を描写するときによく使われる表現だという。

- (vi) maanii pəət pratuu ?əək
 マーニー 開ける 扉 出る
 マーニーは扉を開けると扉が外の方向に動く
 > マーニーは扉を開けられる

また, 例文(vi)の「?əək ‘出る’」が否定された例文(vii)は, 「やっでできる」という動作主の属性(そうした能力があること)を表す例文(vi)と対照的に, 「やっでできない」という動作主の属性(そうした能力がないこと)を表す。

- (vii) maanii pəət pratuu mây ?əək
 マーニー 開ける 扉 否定 出る
 マーニーは扉を開けると扉が外の方向に動かない
 > マーニーは扉を開けられない

もしれないが、話者の事象の捉え方が異なる。

- (63) maanii khâa maaná?
マーニー 殺す マーナ
マーニーはマーナを殺した [他動性表現]

- (64) maanii khâa maaná? taay
マーニー 殺し マーナ 死ぬ
マーニーはマーナを殺しマーナが死んだ [結果性表現]

単に、誰が何をしたのか、何が起こったのか、ということ述べるときには統語的他動詞構文（他動性表現）が使われ、ある原因を前提とした特定の文脈の中での自然の帰結としてのある結果（殺すという行為の生起を前提として当該文脈の中でその行為を受けたものが死ぬ、あるいは死なない）を問題にしたいときには因果動詞句連続構文（結果性表現）が使われる。

因果動詞句連続構文も広い意味での直接使役（意図的ではないかもしれないが、動作主の直接的行為によって受影物が影響を被る）を表し得る。しかし因果動詞句連続構文は、例文(64)のような他動性の高い直接使役の事象（「殺して死ぬ」など）だけではなく、例文(65)(66)のような他動性の低い直接誘発の事象（「行って到着する、落ちて割れる」など）も表せる。

- (65) maanii pay thŭŋ sathāanii rôt fay
マーニー 行く 着く 駅
マーニーは行って駅に着いた [結果性表現]

- (66) cækan tòk tèk
花瓶 落ちる 割れる
花瓶は落ちて割れた [結果性表現]

因果動詞句連続構文が表す結果性という概念と統語的他動詞構文が表す他動性という概念は、「何かが直接関与して何かを引き起こす」という非常に大雑把な事象構造において親和性が見られるものの、それぞれ独立した概念であることがわかる。端的に言えば、因果動詞句連続構文が表す結果性は語用論レベルの言語使用者の解釈を常に伴う意味であり、統語的他動詞構文（および統語的自動詞構文）が表す他動性はいわゆる命題レベルの概念形成に関わる意味（cf. 注 12）である。

ところで、例文(70)のような目的を伴う行為事象を表す動詞句連続構文は、先行動詞句と後続動詞句が2つの継起事象を表しているという点で、因果動詞句連続構文に似ている。

- (70) maanii pîŋ plaa kin
マーニー 焼く 魚 食べる
マーニーは食べるために魚を焼いた

しかし、後続動詞句が表す事象の存在論的な性質（現実事態か非現実事態か）²⁷が、因果動詞句連続構文と目的を伴う行為事象を表す動詞句連続構文とでは異なる。因果動詞句連続構文の後続動詞句は現実の結果事象を表す。一方、目的を伴う行為事象を表す動詞句連続構文の後続動詞句は非現実の目的事象を表す（Takahashi 2009a）。そのため、例文(71)のように「～という目的のために」という目的の意味を明示的に表す語(wáy や phûa)を含み得る。

- (71) maanii pîŋ plaa wáy
マーニー 焼く 魚 ～という目的のために予め
kin
食べる
マーニーは食べるために魚を焼いた

このように、後続動詞句が非現実の事態を表すという点では、目的を伴う行為事象を表す動詞句連続構文は、むしろ次節で説明する分析的使役構文(使役性表現)に似ていると言ふべきかもしれない。

3.3 使役性

使役性とは、使役標識を含む特定の統語形式によって表される機能的意味である。具体的には、「ある人がある意図をもってある人に働きかけることによってある事態を引き起こす」という動的で図式的な使役態事象に内在する

²⁷ 「事象の存在論的な性質（現実事態か非現実事態か）」とは、Johnson (1981: 146) の「事象の存在論 the ontology of a situation」に依拠した概念である。Johnson は「事象の存在論」を「当該事象が、未実現の（非現実の）出来事を構成するものとは対照的に、実世界の（現実の）出来事を構成するものであると認められ得る程度 “the degree to which the situation can be considered as a real part of the course of events in the actual world, as opposed to being part of some projected course of events which has not yet been actualized”」と定義する。

使役標識の前の動詞の有無にかかわらず、例文(72)(73)(74)のような分析的使役構文では、使役標識の直前に否定辞を挿入すれば (mây hây の形にすれば) 「～しないように～した」という意味 (「建物を建てないように命じた、建物を建てないようにした、建物を建てさせなかった」など) を表すことができる。

結果性や契機性と同様、使役性も2つの事象の組み合わせから生まれる意味だが、結果性や契機性の意味を構成する2つの事象はどちらも現実の事象 (実際の原因事象と実際の結果事象) であるのに対し、使役性の意味を構成する事象は1つが現実の事象 (使役者による実際の意志的行為) でもう1つが非現実の事象 (生起が期待される行為者の意志的行為) である。使役性には常に言語使用者の非現実性解釈がかかっていると見える。また、結果性表現や契機性表現で表される結果事象は必ずしも意図的に引き起こされるものではないが、使役性表現で表される結果事象は必ず意図的に引き起こされるものである。

注意すべきは、例文(72)(73)(74)のような間接使役を表す分析的構文は、例文(75)～(81)のような目的や期待を表す分析的構文、および例文(82)～(84)のような願望や希望を表す分析的構文と、非現実性解釈を伴うという点において、類似していることである。

(75) maanii tii maaná? hây (kháw) taay
 マーニー 叩く マーナ 誘発 (彼) 死ぬ
 マーニーは (彼 = マーナが) 死ぬようにマーナを叩いた
 マーニーはマーナを叩き (彼 = マーナを) 死なせた

(76) maanii rɔɔ maaná? hây (kháw) thǔŋ
 マーニー 待つ マーナ 誘発 (彼) 着く
 bâan kòɔn
 家 先に
 マーニーはまず (彼 = マーナが) 家に到着するようにマーナを待った
 マーニーはマーナを待ちます (彼 = マーナを) 家に到着させた

- (77) maanii tii hây maaná? taay
マーニー 叩く 誘発 マーナ 死ぬ
マーニーはマーナが死ぬように叩いた
マーニーは叩きマーナを死なせた
- (78) maanii rɔɔ hây maaná? thǔŋ bâan kɔɔn
マーニー 待つ 誘発 マーナ 着く 家 先に
マーニーはまずマーナが家に到着するように待った
マーニーは待ちますマーナを家に到着させた
- (79) maanii súuu bâan hây maaná? yùu
マーニー 買う 家 誘発 マーナ 住む
マーニーはマーナが住むように家を買った
マーニーは家を買ってマーナを住ませた
- (80) maanii hây ?aakàat thàay thee samǎɔ
マーニー 誘発 空気 入れ換わる いつも
マーニーはいつも空気が入れ換わるようにした
- (81) maanii kin khâaw hây ?im
マーニー 食べる 飯 誘発 満腹だ
マーニーは満腹になるように飯を食べた
- (82) maanii khǔɔ hây maaná? maa
マーニー 請う 誘発 マーナ 来る
マーニーはマーナが来るようお願いした
マーニーはお願いしマーナを来させた
- (83) maanii yàak hây maaná? maa
マーニー 欲する 誘発 マーナ 来る
マーニーはマーナが来るように欲した
マーニーはマーナを来させたかった
マーニーはマーナに来て欲しかった
- (84) nɔɔn hây sabaay (sì?)
寝る 誘発 楽だ (確信)
楽なように寝ろ

楽に寝ろ

例文(72)(73)(74)のような分析的使役構文では *hây* の後ろに生起する動詞は意志的な行為を表す動詞でなければならないが、例文(75)～(84)のような目的や願望を表す分析的構文では *hây* の後ろに生起する動詞は意志的な行為を表す動詞でなくてもよい。しかし *hây* の後ろの動詞句が表す事象が非現実の事象であることは、例文(72)～(84)のすべてに共通している。

hây に続く動詞句が表す非現実の事象にはさまざまな種類があり得る。例文(72)(73)(74)では意図・計画者によって期待された実行者の行為（マーナが建物を建てる）であり、例文(75)(77)では目的となっている事象（マーナが死ぬ）であり、例文(76)(78)(79)(80)(81)では期待されている事象（マーナが到着する、マーナが住む、空気が入れ換わる、満腹だ）であり、例文(82)(83)では望む事象（マーナが来る）であり、例文(84)では求める理想の様態（楽だ）である。例文(84)は指令系の発話行為（命令、懇願など）の表現なので、*hây* の後ろの動詞句が表す事象のみならず、*hây* の前の動詞句が表す事象も非現実の事象である。

もし後ろに動詞句を従える機能語 *hây* の基本的な機能が、意図・計画者と実行者の存在を前提とする使役関係を表すことよりも、むしろここに挙げたような広範囲の被誘発事象を表すことにあるとすれば、後ろに動詞句を従える機能語 *hây* の本務は使役標識ではなく、非現実の被誘発事象一般を導く補語標識²⁸であると考えられるべきかもしれない。そうした被誘発事象補語標識 *hây* の使用条件とは、*hây* の前に生起する動詞は必ず意志的動作あるいは願望を表す動詞でなければならない、したがってその動詞の主語は有生物あるいは有情者を表す名詞句でなければならない、ということである。

後ろに動詞句を従える機能語 *hây* が純粋な使役標識であるのは、例文(74)のように前には動詞が生起せず、後ろにだけ扇動された実行者の意志的行為を表す動詞が生起する場合である。しかし、実際の言語コーパスから多数の用例を集めて分析したメーターピスィット（2000）によると、*hây* の前に動

²⁸ 注5と注17にも非現実の被誘発事象を導く補語標識 *irrealis complementizer* の *hây* について言及がある。

(86) maanii tham hây maaná? taay

マーニー 契機 マーナ 死ぬ

マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが死ぬ」という事態を引き起こした

マーニーがマーナを死なせた [契機性表現]

「マーニーがマーナを叩く, あるいは何かをする」という事象と「マーナが死ぬ」という事象の間に直接的ではないが何らかの間接的な因果関係を見出すとき, タイ語話者は例文(85)(86)のような契機性表現を使う。契機接続詞 *tham hây* は, 例文(85)のように節 (あるいは談話) と節 (あるいは動詞句) を繋げることもできれば, 例文(86)のように名詞句と節 (あるいは動詞句) を繋げることもできる。このように契機接続詞構文 (契機性表現) の統語形式は多様だ。

タイ語では, 有生物の振る舞いあるいは無生物の存在が何らかの他動性の低い事象を誘発すること (「誰かが誰かを悲しませる, 何かが誰かを喜ばせる, 何かが氷を溶かす, 何かが災いをもたらす」など) は, 例文(87)(88)のような契機性表現でしか表せない。

(87) maanii tham hây maaná? sǎ cay

マーニー 契機 マーナ 悲しむ

マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが悲しむ」という事態を引き起こした

マーニーはマーナを悲しませた [契機性表現]

(88) khwaam rón tham hây nám khěj lalaay

熱 契機 氷 溶ける

熱 (の発生) が契機となり「氷が溶ける」という事態を引き起こした

熱は氷を溶かした [契機性表現]

実際の言語コーパスを調べたメーターピスイット (2000) によると, *tham hây* の後ろに生起する動詞はそのほとんどが他動性の低い心理状態や発生, 存在, 消滅, 変化を表す動詞 (「怖がる, 爽快である, 生じる, ある, 消え失せる, 衰える, 変わる」など) であるという。

面白いことに、目的事象を表す補語を従えた動詞「tham ‘する’」を含む構文(89)(90)と、接続詞 tham hây を含む契機接続詞構文(91)(92)は、表面的には同じ形式を持つ。しかし例文(89)(90)の tham は「する」という実質的意味を持つ動詞であり、一方、例文(91)(92)の tham は接続詞 tham hây の1部分であり、tham と hây は切り離し不可能である。

(89) maanii tham hây maaná? taay
マーニー する 誘発 マーナ 死ぬ
マーニーはマーナが死ぬように何かをした
マーニーは何かをしてマーナを死なせた

(90) maanii tham hây maaná? mây taay
マーニー する 誘発 マーナ 否定 死ぬ
マーニーはマーナが死なないように何かをした
マーニーは何かをしてマーナを死なせなかった³⁰

(91) maanii tham hây maaná? taay
マーニー 契機 マーナ 死ぬ
マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが死ぬ」という事態を引き起こした
マーニーはマーナを死なせた [契機性表現]

(92) maanii tham hây maaná? mây taay
マーニー 契機 マーナ 否定 死ぬ
マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが死なない」という事態を引き起こした
マーニーはマーナを死なせなかった [契機性表現]

例文(89)も例文(91)も、マーニーがマーナの死に関与していることを表現している。その点で両者は似ているのだが、それぞれの意味合いは、各例文に

³⁰ 例文(90)の「tham ‘する’」を「chûay ‘助ける’」に変えた例文(viii)のほうがより自然な表現である (タサニー・メーターピスィット氏, 私信)。

(viii) maanii chûay hây maaná? {mây taay / rôot taay }
マーニー 助ける 誘発 マーナ {否定 死ぬ / 免れる 死ぬ}
マーニーはマーナが {死なない / 死ぬのを免れる} ように助けた
マーニーは助けてマーナを死なせなかった

添えた訳にあるように、異なる。例文(89)では, *hây* の後ろに生起している動詞が表す事象は非現実の目的事象である。例文(93)のように *hây* の前に否定辞が生起すれば「マーニーが死なないように何かをした」という意味にもなる。

- (93) *maanii* *tham* *mây* *hây* *maaná?* *taay*
 マーニー する 否定 誘発 マーナ 死ぬ
 マーニーはマーナが死なないように何かをした
 マーニーは何かをしてマーナを死なせなかった³¹

また、例文(94)のように動詞「*tham* ‘する’」の直後に名詞句「*?aray baan yàan* ‘何か’」が生起することもある。

- (94) *maanii* *tham* *?aray baan yàan* *hây* *maaná?* *taay*
 マーニー する 何か 誘発 マーナ 死ぬ
 マーニーはマーナが死ぬように何かをした
 マーニーは何かをしてマーナを死なせた

一方、例文(91)の契機接続詞構文では、後続動詞句で表される結果事象は現実事象である。例文(95)のように「マーナが死ななければならない」という義務表現³²が接続詞 *tham hây* の後ろに生起することもある。

- (95) *maanii* *tham hây* *maaná?* *tôn* *taay*
 マーニー 契機 マーナ 義務 死ぬ
 マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが死ななければならない」という事態を引き起こした
 マーニーはマーナを死なざるを得なくさせた [契機性表現]

³¹ 例文(93)の「*tham* ‘する’」を「*chûay* ‘助ける’」に変えた例文(ix)のほうがより自然な表現である (タサニー・メーターピスィット氏, 私信)。

(ix) *maanii* *chûay* *mây* *hây* *maaná?* *taay*
 マーニー 助ける 否定 誘発 マーナ 死ぬ
 マーニーはマーナが死なないように助けた
 マーニーは助けてマーナを死なせなかった

³² 義務表現とは「外的拘束を背景にした動作主の必然的行為」を述べる表現である。タイ語では典型的には現実事態 (社会規範や権力構造によって行動が拘束された動作主の現在の状況) として描写される (高橋 2008)。一方、英語では典型的には非現実事態 (義務を果たすべく行動する動作主の未来の状況) として描写される。

4. タイ語表現の他動性, 結果性, 使役性, 契機性の体系

前節で他動性, 結果性, 使役性, 契機性という概念の定義を説明したが, それらの概念を関係付けていると思われる意味要素について分析した結果, 以下のことが分かった。

(a) 他動性の典型 (基本他動性) は, 1 人の動作主が関与する直接使役である (cf. 例文(46)-(49); 「彼女は彼を殺す」など)。結果性は, 直接使役の場合もあれば (cf. 例文(54)(56)(62); 「彼女は彼を殺し彼が死ぬ」など), 単に直接的因果関係によってある事態が発生するという直接誘発の場合もある (cf. 例文(58)(60)(65)(66); 「風が家に吹き家が崩壊する」など)。使役性の典型は, 2 人の動作主が関与する間接使役である (cf. 例文(72)-(74); 「彼女は彼に建物を建てさせる」など)。契機性の典型は, 間接的因果関係によってある事態が発生するという間接誘発である (cf. 例文(85)-(88); 「彼女は彼を叩き, それを契機として, 彼が死ぬ」など)。

(b) 他動性, 結果性, 契機性は, 現実の原因事象と現実の結果事象の組み合わせから成り立つ概念である。使役性は, 現実の原因事象と非現実の結果事象の組み合わせから成り立つ概念である (第 3.3 節)。

(c) 他動性の原因事象と結果事象は, 単一の事象を構成する切り離し不可能な表裏一体の事象である (第 3.1 節)。結果性の原因事象と結果事象は, 単一の事象を構成する背景事象と前景事象である (第 3.2 節)。使役性の原因事象と結果事象は, 単一の事象を構成する現実事象と非現実事象である (第 3.3 節)。つまり, 現実の原因事象とは意図・計画者の意志的行為事象であり, 非現実の結果事象とはその行為によって生起が期待される実行者の意志的行為事象である。契機性の原因事象と結果事象は, 間接的因果関係によって主観的に結び付けられた 2 つの事象である (第 3.4 節)。それぞれの概念の原因事象と結果事象の密着度, 統合度を比べると, 他動性がもっともその値が高く, 使役性と契機性がもっともその値が低い。

(d) 他動性表現は, 統語的他動詞構文の場合, 使用される統語的他動詞の種類 (「開ける」などの自他同形の自他交替可能動詞か, 「殺す」などの自他異形の自他交替不可能動詞か) によって, 焦点化される使役連鎖 (事象の理想的概念構造) の範囲が異なる。自他交替可能動詞 (「開ける」など) を使うと,

使役連鎖の起点に位置する原因事象（動作主の開けるという動作）と終点に位置する結果事象（受影物の開くという変化）の両者に焦点が当たる。自他交替不可能動詞（「殺す」など）を使うと、原因事象（動作主の殺すという動作）のみに焦点が当たり、結果事象（受影物の死ぬという変化）は背景化される。一方、統語的自動詞構文（「死ぬ」など）の場合は、原因事象は描写対象とならず、結果事象（受影物の死ぬという変化）のみに焦点が当たる（第3.1節）。結果性表現は、使用される動詞の種類にかかわらず、常に原因事象が背景化され（前提事象となり）、結果事象に焦点が当たる（第3.2節）。

(e) 典型的な他動性は、動作主を主語とする統語的他動詞を含む動詞句1つ（統語的他動詞構文）によって表される（cf. 例文(1)「彼女（動作主）、殺す（統語的他動詞）、彼；彼女は彼を殺す」）。結果性は、2つの動詞句が接続標識を介せず直接結び付けられた形式（因果動詞句連続構文）によって表され、後続動詞の主語は先行動詞の目的語あるいは主語と同じである（cf. 例文(5)「彼女、叩く、彼（先行動詞の目的語かつ後続動詞の主語）、死ぬ；彼女は彼を叩き彼が死ぬ」、例文(60)「彼女（先行動詞と後続動詞の主語）、見る、見える、彼；彼女は見て彼が見える」）。使役性は、使役標識 *hây* と動作主を主語とする動詞を含む動詞句1つあるいは2つからなる形式（分析的使役構文）によって表される（cf. 例文(74)「彼女（動作主）、使役標識、彼（動作主）、建てる、建物；彼女は彼に建物を建てさせる」、例文(4)「彼女（動作主）、命じる、使役標識、彼（動作主）、建てる、建物；彼女は命じて彼に建物を建てさせる」）。契機性を表す形式（契機接続詞構文）は様々だが、最低限、契機接続詞 *tham hây* と動詞句1つが必要とされる（cf. 例文(6)「彼女、契機接続詞、彼、悲しむ；彼女の振る舞いが契機となり彼が悲しむという事態を引き起こす」）。これら4種類の構文の生産性を比べると、特定の動詞（統語的他動詞）を必要とする統語的他動詞構文がもっとも生産性が低く、動詞の種類や数を問わない契機接続詞構文がもっとも生産性が高い。

以上の考察結果を表3にまとめる。各構文の主要構成素の配列も大括弧の中に示した。

表 3 : タイ語表現の他動性, 結果性, 使役性, 契機性の体系

		1つの動詞句	2つの動詞句
現実の原因と現実の結果	単一事象	<p>他動性 e.g. (1)(3) 「統語的他動詞構文」 [VP] ([tham + NP] を含む) <直接使役> 原因と結果に焦点, または原因に焦点 (結果は背景) 「統語的自動詞構文」 [VP] 結果に焦点 (原因は 描写対象外)</p>	<p>結果性 e.g. (5) 「因果動詞句連続構文」 [VP + VP] ([tham + VP] を含む) <直接使役, 直接誘発> 結果に焦点 (原因は背景)</p>
	2つの事象	<p>契機性 e.g. (6) 「契機接続詞構文」 [{NP / VP / Clause / Discourse}] + <u>tham hây</u> + [{VP / Clause}] <間接誘発></p>	
現実の原因と非現実の結果	単一事象	<p>使役性 e.g. (4)(74) 「分析的使役構文」 [(意志 VP +) <u>hây</u> + 意志 VP] ([tham + <u>hây</u> + 意志 VP] を含む) <間接使役></p>	
		<p>目的や願望を表す補語を含む構文 e.g. (75)(80) [(意志/希求 VP +) <u>hây</u> + VP] ([tham + <u>hây</u> + VP] を含む)</p>	
			<p>目的を伴う行為を表す動詞句 連続構文 e.g. (70) [意志 VP + 目的事象 VP] ([tham + 目的事象 VP] を含む)</p>
非現実の原因と非現実の結果	単一事象	<p>理想の様態を表す補語を含 む構文 (指令系の発話行為) e.g. (84) [VP + <u>hây</u> + 結果状態 VP] ([tham + <u>hây</u> + 結果状態 VP] を含 む)</p>	

タイ語話者はこのような様々な選択要素を勘案して、他動性表現（統語的他動詞構文、統語的自動詞構文）、結果性表現（因果動詞句連続構文）、使役性表現（分析的使役構文）、契機性表現（契機接続詞構文）を使い分けているのである。

5. 先行研究の誤謬

本稿の考察結果を踏まえ、本節では、タイ語の他動性および使役性をめぐる表現に関するこれまでの研究に散見される主だった誤謬を指摘したい。

5.1 「先行動詞句が主、後続動詞句が従」

タイ語の結果構文と呼ばれている構文（他動性の高い統語的他動詞を含む先行動詞句と他動性の低い統語的自動詞を含む後続動詞句が接続詞を介さずに直接連結された構文）の分析において、原因事象を表す先行動詞句を「主」、結果事象を表す後続動詞句を「従」と考える研究者が多い（e.g. 影山 2009: 131-134, Matsui 2009, Thepkanjana & Uehara 2004, 上原 & Thepkanjana 2009）。つまり、主動詞を含む先行動詞句だけが実質的な意味を表し、後続動詞句（結果述語）は先行動詞句が表す実質的な意味を脇で支える図式的、機能的な意味を表すという考え方である。そのように考える研究者は、「原因事象を表す動詞句＋結果事象を表す動詞句」という直接使役も直接誘発も表せる汎用性に優れたタイ語の構文を、「動作主の行為を表す定動詞 head＋受影物の結果状態を表す非・定動詞（定動詞に依存した形式）satellite」（Talmy 2000）という直接使役を表すことに特化した汎用性に乏しい英語の典型的な他動詞結果構文に重ね合わせて理解しようとしているのであろう。

しかし、そもそもタイ語の結果構文は因果動詞句連続構文の1種であり、英語の結果構文とは意味的にも形式的にもまったく異なる性質を持つ（cf. 注24）。因果動詞句連続構文では、先行動詞句が表す原因事象も、後続動詞句が表す結果事象も、現実の実質的事象であることに変わりはない。統語的にも、先行動詞句、後続動詞句、共に自立した等位関係にあり、どちらかがどちらかの「従」ではあり得ない（Takahashi 2007, 2009a）。ただ、因果動詞句連続構文を使って聞き手に結果性の意味を伝えようとする話し手の心の中で

は、原因事象はいわば前提事象であり、その原因事象を背景として結果事象が前景化されているといえる。

5.2 「hây 使役構文, tham 使役構文, tham hây 使役構文」

タイ語の使役構文は伝統的に、例文(97a)のような「hây 使役構文」、例文(98a)のような「tham 使役構文」、例文(99a)のような「tham hây 使役構文」の3種類に分類されている。

(97) maanii hây maaná? pay
マーニー 使役 マーナ 行く

- a. マーニーはマーナを行かせた「hây 使役構文」
- b. マーニーはマーナが行くようにした [使役性表現]

(98) maanii tham kêew tæk
マーニー a. 使役 ガラス 割れる
b. する

- a. マーニーはガラスを割った「tham 使役構文」
- b. マーニーはガラスに直接何かをしガラスが割れた [結果性表現]

(99) maanii tham hây maaná? dii cay
マーニー a. 使役 マーナ 喜ぶ
b. する 誘発
c. 契機

- a. マーニーはマーナを喜ばせた「tham hây 使役構文」
- b. マーニーはマーナが喜ぶように何かをした
- c. マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが喜ぶ」という事態を引き起こした [契機性表現]

タイ語研究者の多くはこれら3種類の構文をすべて使役構文として同等に扱い、それぞれの特徴として次のような点に言及する。「hây 使役構文」は、意志的に行動する2人の動作主(意図・計画者と実行者)が参与する典型的な使役態事象を表す。「tham 使役構文」は、何かが直接的に関与してある状態変化が偶発的に起こることを表す。「tham hây 使役構文」は、(具体的な人

の振る舞いでも抽象的な物事でもいいのだが) 何かによって他動性の低い事態 (感情の発生や状態変化など) が引き起こされることを表す。

本稿の考察結果に従えば, 例文(97)のような「hây 使役構文」だけがタイ語の典型的使役構文というべき分析的使役構文 (使役性表現) に相当する。しかし注意すべきは, この構文は目的事象, 願望事象, 理想の様態といった非現実事象を表す補語を含む構文と, 機能語 hây を含むという点において, 共通性を持つことである (第4節の表3を参照せよ)。多くの先行研究で「hây 使役構文」の使用条件について様々な意見が提示され, 完全な意見の一致が見られないのは, こうした異なる意味機能を持つ構文間の違いが十分に認識されずに, すべて「hây 使役構文」として一括りに扱われることが多いからであろう。

一方, 例文(98)のような「tham 使役構文」と言われている構文と, 例文(99)のような「tham hây 使役構文」と言われている構文は, 厳密には使役構文とは言えない。本稿の考察結果に従えば, 前者は動詞「tham ‘する’」を先行動詞句として含む因果動詞句連続構文 (結果性表現) であり, 後者は動詞「tham ‘する’」と目的事象を表す補語を含む構文 ((99b)の読み) あるいは接続詞「tham hây」を含む契機接続詞構文 (契機性表現) ((99c)の読み) である。

「tham 使役構文」は「うっかりやってしまった非意図的な何らかの直接的行為によって, その行為を受けたものに状態変化がもたらされる」場合にしか使われないと説明されることがある (e.g. Vichit-vadakan 1976)。しかし実際のところ, その変化を引き起こすものは人間のうっかりした行為に限らない。例えば, 例文(98)の主語「マーニー」の行為は意図的であってもなくても構わない (Sereechareonsatit 1984)。また, 例文(100)のように直接的行為を受けたもの自体 (例文(100)の場合は刃物) が状態変化を経るわけではない場合もある。

- (100) maanii tham mîit bàat níw
マーニー する 刃物 傷つける 指
マーニーは刃物に直接何かをし (「触る, 当たる, 動かす」など)
刃物が指を傷つけた [結果性表現]

筆者の見解では, 例文(98)(100)の「tham ‘する’」が表す原因事象は, 当該

文脈の中で自然の帰結として生起したのかが問題となっている結果事象を表現するための背景事象として言及されているものである。具体的な描写を避け、何か不特定の原因事象が結果事象と直接的因果関係を持つことだけを示唆する。原因事象と結果事象の間に直接的因果関係さえ認められれば、動詞「*tham* ‘する’」で表される原因事象は、もしかしたら意図的かもしれない不特定の行為であってもよく、さらに例文(101)のように無生物の顕著な影響力であってもよい (Pothipath 1999)。

- (101) *sètthakìt tham chiiwít khǒŋ maaná? pànpàan*
経済 する 人生 所有 マーナ 混迷する
経済はマーナの人生に直接何かをしマーナの人生が混迷した
[結果性表現]

そのような直接的因果関係の存在を示唆する「*tham* ‘する’」を含む因果動詞句連続構文と対照的な機能を持つのが、ある事象が契機となってもう1つの事象が生じることを表す契機接続詞 *tham hây* を含む契機接続詞構文である。契機接続詞構文は間接的因果関係による間接誘発を表す。たとえ主語の指示物が特定の人物であったとしても、その人物の直接的行為によって結果事象が生じたのではなく、あくまでもその人物の何らかの振る舞いが間接的要因となってある結果事象が生じたことを表す。契機接続詞 *tham hây* は、もはや *tham* と *hây* の2語に分けることのできない (そのため *tham* の後ろに名詞句や否定辞を挿入することのできない)、完全に文法化された (実質語の機能を完全に失った) 機能語である。通常、主語の後ろに生起して動詞句を従える *cuŋ* や *thũŋ* などの順接関係を表す接続詞³³とは異なり、契機接続詞 *tham hây* は主語を含んだ節を後ろに導くことができる。言い換えれば、契機接続詞 *tham hây* の前に生起する言語形式 (名詞句, 動詞句, 節, 談話) とその後ろに生起する言語形式 (動詞句, 節) の相互依存度が低く、それゆえ、それら両形式の意味内容の独立性が高い。例文(102)のように契機接続詞 *tham hây* の後ろの言語形式には義務標識さえ含まれ得る。

³³ 接続詞 *cuŋ* の意味機能については Takahashi (2004) を参照せよ。

(102) maanii tham hây maaná? tŏŋ taay
マーニー 契機 マーナ 義務 死ぬ

マーニー (の振る舞い) が契機となり「マーナが死ななければ
ならない」という事態を引き起こした

マーニーはマーナを死なざるを得なくさせた [契機性表現]

6. まとめ

タイ語は典型的な孤立語であり、文法範疇概念の特定化が必須ではなく、動詞には固定化された項構造 (必須項) もない。そうした特徴が動詞 (句) 連続構文の多用を可能にしており、タイ語が「動詞 (句) 連続言語」と称される所以である。逆から言えば、(印欧語のような文法化が進んでいる言語では当たり前) の言語単位だと思われる (文あるいは文型というものを規定することが非常に難しい言語だということである。タイ語の基本文型をどう規定すべきか、未だにすべてのタイ語研究者に共通する認識の在り方は存在しないとあってよいだろう (高橋 2006)。他動性表現や使役性表現に関して、それをどう定義するのかといった根本的問題を含め、様々な説明や主張が繰り返されてきた。

本稿では、タイ語の他動性や使役性に関する様々な表現を整理分類し、その意味機能を体系的に説明することを試みた。その中で、統語的他動詞構文と因果動詞句連続構文の使い分けや、契機接続詞構文と動詞「tham ‘する’」を含む他の構文の区別などについて、本稿独自の見解を述べた。さらに、「tham 使役構文」にまつわる誤謬を初めとする先行研究における誤謬をいくつか指摘した。本稿の議論を踏み台として、今後もタイ語の他動性や使役性をめぐる表現についての研究が益々進展していくことを願って止まない。

参考文献

バンチョンマニー, ブッサバー (1999) 『動詞の意志性について—タイ語・日本語の対照研究をめざして—』東京外国語大学, 未公開博士論文.

Bisang, Walter. 1995. Verb serialization and converbs—differences and similarities. *Converbs in Cross-Linguistic Perspective: Structure and Meaning of Adverbial Verb Forms—Adverbial*

- Participles, Gerunds*—, ed. by Martin Haspelmath and Ekkehard König, pp. 137-188. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Bisang, Walter. 1996. Areal typology and grammaticalization: Process of grammaticalization based on nouns and verbs in East and mainland South East Asian languages. *Studies in Language* 20.3: 519-597.
- Bisang, Walter. 2004. Grammaticalization without coevolution of form and meaning: The case of tense-aspect-modality in East and mainland Southeast Asia. *What Makes Grammaticalization? A Look from its Fringes and its Components*, ed. by Walter Bisang, Nikolaus P. Himmelmann, and Björn Wiemer, pp. 109-138. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Croft, William. 1990. Possible verbs and the structure of events. *Meaning and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*, ed. by SL. Tsohatzidis, pp. 48-73. London: Routledge.
- Croft, William. 1994. Voice: Beyond control and affectedness. *Voice: Form and Function*, ed. by Barbara Fox and Paul J. Hopper, pp. 88-117. Amsterdam: John Benjamins.
- Croft, William. 1998. Event structure in argument linking. *The Projection of Arguments: Lexical and Compositional Factors*, ed. by Miriam Butt and Wilhelm Geuder, pp.21-63. Stanford: CSLI Publications.
- Croft, William. 2001. *Radical Construction Grammar: Syntactic Theory in Typological Perspective*. Oxford: Oxford University Press.
- Dejthamrong, Orathai. 1970. หน้าที่ทำของคำ “ให้” ในภาษาไทย (Grammatical Functions of the Word *hây* in Thai language). Unpublished Master’s thesis, Chulalongkorn University.
- Diller, Anthony V. N. 1988. Thai syntax and “national grammar”. *Language Sciences* 10.2: 273-312.
- Diller, Anthony V. N. 1993. Diglossic grammaticality in Thai. *The Role of Theory in Language Description*, ed. by William A. Foley, pp. 393-420. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 江田すみれ (1983) 「てやる・てくれる・てもらう」とタイ語の表現—*hây* の用法に注目して— 『日本語教育』 49, pp.119-132.
- Givón, Talmy. 1984. *Syntax: A Functional-Typological Introduction Vol.1*. Amsterdam: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson. 1980. Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56.2: 251-299.
- Indrambarya, Kitima. 1997. The status of the word *hây* in Thai. *Papers in Southeast Asian*

高橋清子. 2010. 「タイ語における他動性と使役性」西光義弘、プラシヤント・パルデシ (編) 『自動詞・他動詞の対照』, 91-142. 東京: くろしお出版.
Takahashi, Kiyoko. 2010. Transitivity and Causativity in Thai. In Nishimitsu, Yoshihiro and Prashant Pardeshi (eds.) *Cross-linguistic Studies on Intransitive and Transitive Verbs*, 91-142. Tokyo: Kurosio.

- Linguistics No. 16*, ed. by Marybeth Clark, pp. 79-118. Canberra: Pacific Linguistics.
- Intratrat, Charatdao. 1996. *กระบวนการที่คำกริยากลายเป็นคำบุพบทในภาษาไทย (Grammaticalization of Verbs into Prepositions in Thai)*. Unpublished Ph.D. dissertation, Chulalongkorn University.
- Iwasaki, Shoichi, and Preeya Ingkaphirom. 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Johnson, Marion R. 1981. A unified temporal theory of tense and aspect. *Syntax and Semantics, Vol. 14: Tense and Aspect*, ed. by Philip J. Tedeschi and Annie Zeanan, pp. 145-175. New York: Academic Press.
- 影山太郎 (2009) 「第 3 章 語彙情報と結果述語のタイポロジー」小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』, pp.101-139, ひつじ書房.
- Kullavanijaya, Pranee. 1974. *Transitive Verbs in Thai*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Hawaii.
- Lakoff, George. 1977. Linguistic gestalts. *Papers from the 13th Regional Meeting, Chicago Linguistics Society, April 14-16, 1977*, ed. by Woodford Beach et al., pp. 236-287.
- Lekawatana, Pongsri. 1970. *Verb Phrases in Thai: A Study in Deep-Case Relationships*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Michigan.
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson. 1989. *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Matsui, Natsuki. 2009. Connectivity between cause and result in Thai resultative constructions. *Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium*, ed. by Minegishi Makoto et al., pp. 45-56. Tokyo: Global OEC Program 'Corpus-based Linguistics and Language Education', Tokyo University of Foreign Studies.
- メーターピスイット, タサニー (2000) 「タイ語の受動態と使役態の現れ方と動詞の分類」 『言語・地域文化研究』 6, pp.59-79.
- 三上直光 (1984) 「タイ語の使役文の意味的特徴について」 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』 16, pp.205-216.
- 三上直光 (2002) 『タイ語の基礎』 白水社.
- Mikami-Nomura, Naomitsu. 1994. Semantic properties of the causative constructions in Vietnamese, Khmer, and Thai. *Current Issues in Sino-Tibetan Linguistics*, ed. by Hajime Kitamaru, Tatsuo Nishida, and Yasuhiko Nagano, pp. 956-962. Osaka: National Museum of Ethnology.

高橋清子. 2010. 「タイ語における他動性と使役性」西光義弘、プラシャント・パルデシ (編) 『自動詞・他動詞の対照』, 91-142. 東京: くろしお出版.

Takahashi, Kiyoko. 2010. Transitivity and Causativity in Thai. In Nishimitsu, Yoshihiro and Prashant Pardeshi (eds.) *Cross-linguistic Studies on Intransitive and Transitive Verbs*, 91-142. Tokyo: Kuroasio.

峰岸真琴 (1988) 「屈折も活用もない言語：タイ語」『月刊言語』 17.8, pp.90-95.

峰岸真琴 (2000) 「類型論から見た文法理論」『言語研究』 117, pp.101-127.

峰岸真琴 (2002a) 「類型分類の再検討—孤立語の視点から」『アジア・アフリカ言語文化研究』 63, pp.1-36.

峰岸真琴 (2002b) 「言語の構造的性をめぐって—非階層的アプローチ—」『アジア・アフリカ文法研究』 31, pp.119-136.

峰岸真琴 (2006) 「動詞連続と言語理論の諸前提」『東ユーラシア言語研究』 1, pp.191-211, 好文出版.

峰岸真琴 (2007) 「孤立語の他動性と随意性」角田三枝・他 (編) 『他動性の通言語的研究』, pp.205-216, くろしお出版.

Needleman, Rosa Miriam. 1973. *Thai Verbal Structure and Some Implications for Current Linguistic Theory*. Ph.D. dissertation, University of California, Los Angeles.

ニラタワット, ミンミット (1980) 「受身と使役の表現の日・タイ・英語の対照研究」『日本語教育』 40, pp.121-128.

Noss, Richard B. 1964. *Thai Reference Grammar*. Washington, D.C.: Foreign Service Institute.

Pothipath, Vipas. 1999. *หน่วยสร้างกริยิตแบบวิเคราะห์ในภาษาไทย (Analytic Causative Constructions in Thai)*. Unpublished Master's thesis, Chulalongkorn University.

Rangkupan, Suda. 1997. An investigation of *hây* complex constructions in Thai. [http://wings.buffalo.edu/soc-sci/linguistics/people/students/ma_theses/rangkupan/RANGKM A.PDF] (検索日：2008年10月17日)

Rangkupan, Suda. 2007. The syntax and semantics of GIVE-complex constructions in Thai. *Language and Linguistics* 8-1: 293-234.

Rappaport Hovav, Malka and Beth Levin. 2001. An event structure account of English resultatives. *Language* 77-4: 766-797.

坂本比奈子 (1985) 「タイ語の動詞の下位分類について」『アジア・アフリカ言語文化研究』 30, pp.177-192.

Serechareonsatit, Tasanee. 1984. *Conjunct Verbs and Verbs-in-Series in Thai*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Illinois at Urbana-Champaign.

Sriphen, Salee. 1982. *The Thai Verb Phases*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Michigan.

高橋清子. 2010. 「タイ語における他動性と使役性」西光義弘、プラシヤント・パルデシ (編) 『自動詞・他動詞の対照』, 91-142. 東京: くろしお出版.
Takahashi, Kiyoko. 2010. Transitivity and Causativity in Thai. In Nishimitsu, Yoshihiro and Prashant Pardeshi (eds.) *Cross-linguistic Studies on Intransitive and Transitive Verbs*, 91-142. Tokyo: Kurosio.

Takahashi, Kiyoko. 1997. Verbs for global locomotory body motion in Thai. *Proceedings of the 16th International Congress of Linguistics*. (CD-ROM 版のため頁番号は記載なし)

Takahashi, Kiyoko. 2004. Logical resultative construction in Thai. 『神田外語大学紀要』 16, pp. 203-224.

高橋清子 (2006) 「日本語から見たタイ語—タイ語・中国語・日本語三つ巴の楽しさ—」『日本語学』 25.3, pp.34-44.

Takahashi, Kiyoko. 2006. The allative preposition in Thai. *Papers from the 15th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2005*, ed. by Paul Sidwell, pp. 111-120. Canberra: Pacific Linguistics.

Takahashi, Kiyoko. 2007. Accomplishment constructions in Thai: Diverse cause-effect relationships. *Papers from the 13th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2003*, ed. by Shoichi Iwasaki, Andrew Simpson, Karen Adams, and Paul Sidwell, pp. 263-277. Canberra: Pacific Linguistics.

高橋清子 (2008) 「タイ語の tɔŋ の歴史的意味変化: 義務モーダルの文法化・多機能化に関する事例研究」『日本認知言語学会論文集』 8, pp.612-615.

Takahashi, Kiyoko. 2008. Post-verbal noun for a part in Thai. *Papers from the 14th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2004, Vol. 2*, ed. by Wilaiwan Khanittanan and Paul Sidwell, pp. 63-72. Canberra: Pacific Linguistics.

高橋清子 (2009a) 「タイ語の石碑文に見られる ɩ̯ hây の用法」『神田外語大学紀要』 21, pp.331-368.

高橋清子 (2009b) 「タイ語の機能語 hây の意味変化の方向性」『日本言語学会第 138 回大会予稿集』, pp.148-153.

Takahashi, Kiyoko. 2009a. Basic serial verb constructions in Thai. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 1: 215-229.

Takahashi, Kiyoko. 2009b. Arrival expressions in Thai. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 2: 175-193.

Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics Vol.2: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge: MIT Press.

Thepkanjana, Kingkarn. 1986. *Serial Verb Constructions in Thai*. Unpublished Ph.D. dissertation, University of Michigan.

高橋清子. 2010. 「タイ語における他動性と使役性」西光義弘、プラシヤント・パルデシ (編) 『自動詞・他動詞の対照』, 91-142. 東京: くろしお出版.

Takahashi, Kiyoko. 2010. Transitivity and Causativity in Thai. In Nishimitsu, Yoshihiro and Prashant Pardeshi (eds.) *Cross-linguistic Studies on Intransitive and Transitive Verbs*, 91-142. Tokyo: Kurosio.

Thepkanjana, Kingkarn. 1992. Transitivity continuum in Thai. *Proceedings of the 3rd International Symposium on Language and Linguistics: Pan-Asiatic Linguistics, Chulalongkorn University, Bangkok, Thailand, January 8-10, 1992, Vol.1*, pp. 308-319. Bangkok: Publication Subcommittee of the Pan-Asiatic Linguistics Symposium.

Thepkanjana, Kingkarn. 2000. Lexical causatives in Thai. *Constructions in Cognitive Linguistics*, ed. by Ad Foolen and Frederike van der Leek, pp.259-281. Amsterdam: John Benjamins.

Thepkanjana, Kingkarn. 2003. A cognitive account of the causative/inchoative alternation in Thai. *Cognitive Linguistics and Non-Indo-European Languages*, ed. by Eugene H. Casad and Gary B. Palmer, pp. 267-274. Amsterdam: John Benjamins.

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara. 2004. Semantic types of resultative predication in transitive-based resultative constructions in Thai. *Papers from the Eleventh Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2001*, ed. by Somsong Burusphat, pp. 731-747. Tempe: Program for Southeast Asian Studies, Arizona State University.

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara. 2009. Resultative constructions with “implied-result” and “entailed-result” verbs in Thai and English: A contrastive study. *Linguistics* 47-3: 589-618.

Tsunoda, Tasaku. 1985. Remarks on transitivity. *Journal of Linguistics* 21: 385-396.

上原聡・Kingkarn Thepkanjana (2009) 「第9章 タイ語における結果構文」小野尚之 (編) 『結果構文のタイポロジー』, pp.365-406, ひつじ書房.

Vichit-vadakan, Rasami. 1976. The concept of inadvertence in Thai periphrastic causative constructions. *Syntax and Semantics Vol.6: The Grammar of Causative Constructions*, ed. by Masayoshi Shibatani, pp. 459-476. New York: Academic Press.

Warotamasikkhadit, Udom. 1994. Is *hây* really a benefactive-causative in Thai? *Papers from the 2nd Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 1992*, ed. by Karen L. Adams and Thomas John Hudak, pp. 383-388.

Wongsantiwanich, Wipa. 1983. คำกริยากริยิตในภาษาไทย (*Causative Verbs in Thai*). Unpublished Master's thesis, Chulalongkorn University.

Yap, Foong Ha and Shoichi Iwasaki. 1998. ‘Give’ constructions in Malay, Thai and Mandarin Chinese: A polygrammaticization perspective. *CLS 34, Part1: Papers from the Main Session*, ed. by M. Catherine Gruber et al., pp. 421-437.

吉川武時 (1978) 「日本語とタイ語の使役表現をめぐる調査の報告」『日本語学校論集』5,

高橋清子. 2010. 「タイ語における他動性と使役性」西光義弘、プラシャント・パルデシ (編) 『自動詞・他動詞の対照』, 91-142. 東京: くろしお出版.

Takahashi, Kiyoko. 2010. Transitivity and Causativity in Thai. In Nishimitsu, Yoshihiro and Prashant Pardeshi (eds.) *Cross-linguistic Studies on Intransitive and Transitive Verbs*, 91-142. Tokyo: Kurosio.

pp.164-169.